とある太陽神と氷結水龍《フリーズドラゴン》

ギャツビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある太陽神と氷結水龍（フリーズドラゴン）

【Ｎコード】
Ｎ２８９５Ｖ

【作者名】
ギャツビー

【あらすじ】
ハイパーゼクターの暴走でカブトの資格者であった少年は異世界、『学園都市』に飛ばされてしまう。そんな彼を一番最初に発見したのは、『氷結水龍（フリーズドラゴン）』の能力を有する非公式のレベル５だった！―科学と魔術が交錯する世界に太陽神が交わるとき、物語は始まる！―

プロローグ（前書き）

どうもはじめましての方ははじめまして！ネクサスです！これから
どうぞよろしくお願い致します！

プロローグ

《ＭＡＸＩＭＵＭ　ＲＩＤＥＲ　ＰＯＷＥＲ》

銀と赤の装甲に青い複眼を持つ戦士が静かに宇宙から侵略目的でやって来た異形へと歩み寄る。ただゆっくりと・・・。

《ＯＮＥ》

腹部のベルトに装着されている何かのボタンを一つ押す。

《ＴＷＯ》

もう一つ。すでに体力が限界で異形はただその光景を見ていることしかできない。異形はその動作が何を意味するのか分かっているからこそ逃げ出したい。

《ＴＨＲＥＥ》

だが体が言うことを聞かない。そして銀と赤のカブトムシを模した戦士は静かに言い放つ。

「ハイパー・・・キック！！」

《ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ》

「ハァァァァァ！！」

ベルトのゼクターホーンを勢いよく閉じ、そして再び開くと、戦士はそのまま異形へ向かって走り出す。

「これで…終わりだァァァァァ！」

戦士はそのままの勢いで前方に飛び上がるとタキオン粒子が火花を散らしているその右足が異形の体を捉える。

「ぐうぅぅぁぁぁぁ！！？」

その攻撃を喰らった異形は数メートル後ろの壁に激突。そのまま爆散してしまう。

「ハァ…ハァ…ハァ…」

戦士は異形の爆発を確認すると床に座り込む。息を切らしている彼は仮面の下で、かなりすがすがしい顔をしていた。だが彼には気づくことは出来なかった。ベルトの右側についていた灰色の昆虫型の機械から少し火花が散っていたことを・・・。

「翔！」

「新？」

銀と赤の戦士を翔と呼ぶ声。それを聞いた彼は声がの主と思われ

る名前をつぶやきながらその方向を見る。そこにはクワガタムシを模した青い戦士が立っていた。

「終わったのか？」

「あぁ…ばっちりな…」

座り込んでいた彼は青い戦士の肩を借り、立ち上がろうとした瞬間にそれは起きた。

《ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》

「「なっ！？」」

二人はほぼ同時に叫ぶが無常にも誤作動か運命のいたずらか、戦士の姿はその場から忽然と消えた。

「翔・・・？」

青い戦士はその場で彼の名前を呼ぶ。返事は返ってこない・・・

この日を境に彼の消息は途絶えた。

―――――――――――――――――――――

青い髪の少年がいた。青というよりは澄んだ水色、シアンといったほうが良いかもしれない。年は高校生ぐらい。彼は道を歩いていた。行き先は自分が住んでいる場所だ。

自分の住んでいるマンションへたどり着き、これから部屋へと向かおうとした瞬間、それは唐突に現れた。

「―ッ！？」

目の前の空間が歪んだと思ったら、突如そこに銀と赤の装甲、青い複眼、カブトムシを連想させるデザインの人型が現れた。

少年が驚いているうちにベルトに付属されていた赤いカブトムシのような機械と灰色の昆虫型の機械はどこかへ飛んでいってしまい。次の瞬間、よく分からない人型が倒れていた場所には・・・少年が倒れていた。と言っても水色の髪の少年ではない。黒髪の少年だ。

「おいっ！？大丈夫か！？」

「ぐぅ…あぁ…」

水色の髪の少年は急いで彼を担ぐと自分の住んでいる部屋へつれて行った。

「黄泉川！」

ダンッ！と勢いよくドアを開けながら家主の名前を叫ぶがそこには誰もいない。水色の髪の少年と翔と呼ばれていた少年だけがいた。

「チッ！…そういやアイツは警備員（アンチスキル）の仕事だっけか？」

そんなことをつぶやきながら彼は適当なソファに寝かせてやる。

「しっかしなんであんな格好であんなところに現れてぶっ倒れたんだ？」

水色の髪の少年は救急車を呼ばなかった。理由としては彼のあの異様な姿から下手に一般人にさらわせるのは気が引けたから、そして何故あの姿とどうしてここに現れたのかを聞くためだ。

「ッ…ぅん？」

彼は目を覚ました。当たり前だがここが何処かわかっていない様子。とりあえず目立った外傷が無いことを確認すると、ほっと一息つく。

「目が覚めたか？」

タイミングを見計らって水色の髪の少年は口を開く。

「……ここは？」

「うち」

彼の問いに水色の髪の少年は適当に答える。

「うちって…じゃあお前がここまで運んでくれたのか？」

「まぁ…そう言うことになるな」

「ありがとう」

「礼はいいけどそんなことよりいったい何であんなとこにいたんだ？」

「いや、今起きたばかりだから何処に倒れていたかはわからない…」

「じゃあ自分の意思でうちの近くに来た訳じゃ無いわけだ」

会話は続く。

「次だ。あのカブトムシみたいな駆動鎧（パワードスーツ）は何だ？」

「パワードスーツ？」

水色の髪の少年は彼の問い返しに眉を潜める。

こいつは今何て言った？駆動鎧（パワードスーツ）を知らない？とするとこの学園都市の人間じゃない？だったらどうやってここに来た？わざわざ警備員（アンチスキル）の自宅の前に転げ落ちてきた馬鹿だったりするのか？いや本人も自分の意思でここに来た訳では無いと言った。分からない…こいつはいったい何なんだ？

水色の髪の少年は自らの思考の泥沼にはまってしまう。

「お前今何て名前の都市にいるか分かるか？」

「検討もつかないな…」

決まりだ。こいつは学園都市の人間じゃないしＩＤも持ってない。そしてここが学園都市だということを理解していない。まずはそこから話すべきか…

「ここは学園都市だぜ？」

「学園都市？何処だそこ？」

水色の髪の少年は今度こそ驚く。学園都市を知らない？まさかアホ？又は記憶喪失か何かか？

失礼な考えに至ってしまったが常識的に知らないと言うのはおかしい。水色の髪の少年はからは言葉も出ない。それを見た彼は少し考えると何か思い付いた様に言葉を発した。

「あぁ～……あれか…別の世界に来ちゃったかなぁ…」

「は？」

水色の髪の少年は彼の言っていることがまるで理解できなかった。

―科学と魔術が交錯する世界に太陽神が交わるとき、物語は始まる！―

―――――――――――

何処か建物の中にそれはあった。巨大な試験管の様な者の中に液体が入っている。そしてなにやらその中に人のような物が逆さに浮いていた。

「これは予期せぬお客さんだな」

男性とも女性とも若者とも老人ともとれる何とも不気味な声でそれは呟いた。

プロローグ（後書き）

感想待ってます！

登場人物紹介（オリキャラ）（前書き）

オリキャラが増えるごとに更新していきたいと思います。

登場人物紹介（オリキャラ）

◆古澤悠斗（ふるさわゆうと）

整った顔立ちに透き通るような綺麗な水色の髪をしている。身長は１７０ｃｍギリギリ届かないくらい。

本来レベル５だが本人の希望でレベル２と偽り、極力それ以上の能力は使わないようにしている。学校には普通に通っているが、何故か寮ではなく黄泉川愛穂と言う警備員（アンチスキル）の人間の家に居候している。基本的に心を真に開いた人間意外は無口だが、これは過去の経験に関係があるらしい。

能力は氷等を操る『氷結水龍（フリーズドラゴン）』。絶対零度まで水分の温度を下げることができる。また、気体である窒素や酸素も温度を下げることにより液体化させることが可能。
その応用で能力名の由来にもなっている氷と水の龍を操る

過去にトラウマがあるようでそれに関しては一切口を閉ざしているが、置き去り《チャイルドエラー》と何らかの繋がりがあった模様。

等々今のところ謎が多い。

◆天道翔（てんどうしょう）

仮面ライダーカブトのパラレルワールド出身。ワームのボスと思われるワームを倒したあとハイパーゼクターが暴走。異世界の学園都市に飛ばされる。

見た目は黒髪童顔。背は１６５ｃｍくらいと少し低め。

現在は学校に通っておらず、悠斗の紹介で教師の月詠小萌の家に居候している。　悠斗を仲介に上条当麻とも知り合い、彼と共に魔術関連の事件に巻き込まれていく。

野次馬魂があり、何事にも首を突っ込みたがる一面やハッキングが得意という意外な一面も。因みにハッキングはカブトの世界にいたときにゼクトの最深部まで潜り込んだ程の腕前。

また、彼と同じ時期に現れたワームを自分のせいだと考え、学園都市にいるワームをすべて自分一人で倒そうとしている。

氷結水龍《フリーズドラゴン》（前書き）

能力名がサブタイトルのわりに能力ほとんど使わない…

相手が弱すぎた？

氷結水龍《フリーズドラゴン》

二人の少年が出会ってから1ヶ月。彼らはあの出来事の後、とりあえず、お互いの言うことを信じることにしていた。

不思議な装甲に身を包んでいた黒髪の少年。名は天道翔と言う。また、不思議な装甲の名前はカブト。それを製作した者からは太陽神などとも呼ばれていた。因みに彼をこの世界へ飛ばしてしまったのはハイパーゼクターと呼ばれるカブトの強化ツールだ。

そして彼が飛ばされてしまった学園都市。名前からして日本であるが日本からは独立した一つの国の様な状態になっている。学園都市の中では外の世界。つまり学園都市の外より2～30年先の技術で作られるほど、科学技術が発達しており、なんと科学的に超能力を解析、開発する事に成功していると言う。

お互い最初は信じることはしなかったが両方食い下がらないので、とりあえずお互いを信じる。と言うことに落ち着いたのだ。

現在翔は月詠小萌と呼ばれる見た目は子供、頭脳も年齢も大人。なんて言葉がそっくりそのまま当てはまる様な謎の女性の家に居候させてもらっている。

―少年二人が出会って1ヶ月。遂に物語は動き出す！―

水色の髪の少年、名を古澤悠斗という。彼は今適当に外を歩いていた。手にはコンビニで何か買ったらしいビニール袋ががるが、心なしか少し凍っているようにも見える。そんな中、彼はある現場を

目にする。

制服を着た少女となにやら不良っぽい集団が戦っている。最初の二人は一瞬で少女にあしらわれてしまうが、残りの特徴的な歯並びをした青年はよく分からない方法で少女を圧倒していく。先程の戦いから見るに少女は空間移動（テレポート）の使い手のようだがうまく機能していない。演算の妨害でもされているのだろうか？

そんなことを考えていた瞬間青年の蹴りが、少女のわき腹にヒットする。全力で放たれたそれは少女の体など簡単に吹き飛ばしてしまう。それを見た瞬間悠斗の思考が吹っ切れた。その場にビニール袋が落ちる

「いぃ感触だったぜぇ？」

青年の高笑いを悠斗の声が遮断する。

「なぁあんた……それって具体的にどこが面白いのか教えてくんねぇか？」

「誰だテメェ？」

青年は問うが、彼は答えない。代わりといわんばかりに彼の蹴りが青年を襲う。が捕らえていたと思って放った蹴りは、青年とは少しずれた場所をただ空振りしてしまう。

「はん？どこ狙ってやがんだ？」

「…さっきも思ったがやっぱ能力か？」

もともと少女の攻撃が当たらない時点で今の攻撃が当たるとは思っていなかった。重要なのはどんな能力で狙いをそらされているのか

「答えるとか思ってんのか？」

「思わないね」

次は青年の蹴りが悠斗を襲う。おそらくガードしてもそれとは関係のない場所にけりは当たる。だったら避けるべきだ。

そう思った悠斗はすぐに青年から離れるように身を低くして地面を転がる。一応は避けることが出来たが、こんなこといつまでやってても時間の無駄だしいつかは当たる。それまでに相手の能力を見極めないと。

（像が本来とは違う場所に移しだされてんのか…？だったらどうやって？光の屈折！？）

悠斗はそう結論付けると同時に自分の周りに薄い氷を張る。これが彼の能力だ。とはいっても能力で出来ることと言ったほうが正しいだろう。

「はぁ？何だそれ？そんな薄っぺらな氷で俺の攻撃防げるとか思ってんじゃねぇだろうな？」

「さあな？」

「ッ！？テメェ！？」

悠斗の安い挑発に乗った青年は再び悠斗に向かってけりを放つ。今度は避けようとはしない。

「喰らえ！」

ガシィ！青年の蹴りはいとも簡単に悠斗の周りを覆っていた氷を砕き、そのままの勢いでけりは悠斗を襲うが、悠斗はあっさりとその足をつかむと、それをつたって手をつかむ。

「なっ！？」

「ったく…面倒な能力だな…？でもこれで逃がさねぇぜ？」

そういいながら放たれた彼のこぶしはまっすぐ青年の顔面を捉えた。

簡単な話だ。光を強引に曲げ、相手に自分のを誤った場所にいるように見せる能力ならその強引に曲げられた光を元に戻せばいい。彼はそれに薄い氷を利用した。

「ごぶぅ！？」

青年は大きく後ろにのけぞるが、ふらふらした足でどうにか踏ん張る。

「て……テメェ」

「さぁお前の能力はもう見飽きた…終わりにしようぜ？」

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁ！！」

青年は叫びながらナイフを取り出すと悠斗に向かって走り出す。

それを見たところで、悠斗の冷静が崩れることはない。

「はぁ…」

悠斗がため息を一つつくと同時に青年と彼の間に高さ2メートルちょっとの氷の壁が出来上がる。人間急には止まれない全力で氷の壁にぶつかった青年はそのまま意識を手放した。

「…まぁこんなもんか…おい大丈夫か？」

青年が起き上がらないのを確認すると悠斗は先に戦っていた少女の下へ向かう。

「えぇ…まぁ…」

よく観ると腕には風紀委員（ジャッジメント）の紋章が見える。なにかの事件だったのかな？と彼は勝手に解釈する。

「助かりましたの…ご協力感謝いたします」

「協力なんてしてねぇよ…ただあのクソ野郎が気に入らなかっただけだしな」

「そうですの…」

「まぁいいや…じゃあなー今度は不良なんかにのされんなよー」

若干棒読みでそんなことを言う悠斗に即座に少女は講義しようとするがそれよりも早く彼は歩き出してしまった。

「ふう…」

悠斗は家に帰ると若干疲れた様子でソファにすわる。そして昼寝でもしようかと考えていたときにそれは聞こえた。

「悠斗お前今日ちょっと活躍したらしいじゃん？」

ふと女性の声がする。その方向を見てみるとジャージ姿でスタイルのいい女性が立っていた。

「黄泉川…今日はいんのか？……てかなんでそれ知ってんだ！？」

「私だってさっき帰ってきたところじゃん！それに警備員（アンチスキル）の情報網をあんまなめないでほしいじゃん！」

「あんま胸張っていえる話でもねぇぞそれ」

個人情報もれてんじゃねぇの？と悠斗はつぶやくが、小さかったためそれは黄泉川には届いていなかった。

まぁいいか…と彼は冷凍庫の中から適当にカップのバニラアイスを一つ取り出すと、あることを思い出す。

「あ…そういや買って来たのあそこにおきっぱだっけ…まぁいいや」

少女を助ける際にどこかで落としたビニール袋のことだ。だがあまり気にしていない様子でそのままアイスを口に運んだ。

「しっかし別にお前がＬｖ５だって公認されてもへるもんじゃないいし良いと思うんだけどなぁ」

黄泉川がそうつぶやく。彼は学園都市の普通教育は受けているものの超能力を開発するための時間割（カリキュラム）はまったく受けていない。自然に発現した超能力者、原石と呼ばれる存在だった。彼がＬｖ５だということを知ってるのは非公式で能力測定を行った黄泉川と、その他自分が信頼できると思った数少ない人間だけだ。

そんな中ふと机の上に置いてあった雑誌をめくっみる。そこのページのコーナーに都市伝説とうんぬんと書かれたものを発見する幻想御手（ベルアッパー）だの幻想殺し《イマジンブレイカー》だの書いてあるが一つの名前に目が留まる。それは…太陽神（カプト）の文字。

アイツら…いつの間に都市伝説になったよ…と、幻想殺しの右手を持つ少年と太陽神と呼ばれた少年の顔を思い浮かべ壮大にため息をついた。

氷結水龍《フリーズドラゴン》（後書き）

悠斗「やっと名前は明かされたか…」

翔「別にプロローグで明かされても良かったんじゃない？減るもんじゃないし」

あれは…ノリだ…凄まじく

翔・悠斗「おい！？」

地球外生命体《ワーム》（前書き）

今回まさかの工場長の早すぎる登場ですっ！

地球外生命体《ワーム》

学園都市には底知れぬ闇がある。そのなかに暗部組織と呼ばれるものが複数存在する。そのなかに学園都市第2位の超能力、未元物質（ダークマター）を有する垣根提督を筆頭とした暗部組織、「スクール」と呼ばれる組織がある。

「で？依頼がこの何もない表の人間を消せと？」

『何かあるらしいが依頼主はそれが何かは話していない。何でもお前が直接でなければいけないらしい…何かを隠したいのかは知らないが』

その垣根提督は電話越しに誰かと話していた。提督自身、その話している電話の男と直接会ったことはない。手には何処にでもいそうな感じの青年が写し出されている写真がある。

「まぁいい…直接俺がそいつをぶっ殺せばいいんだな？」

普段の彼だったら断っていたところかもしれない。だが彼は引き受けた。ギャラは悪くなかったし、基本的に表に干渉しないはずの裏にいる自分に表の人間を殺せと言う依頼に興味がわいたのだ。

『その通りだ』

プツッっと電話が向こう側から一方的に切られる。提督はその事に一瞬苛立ちを覚えるが直ぐに苛立ちを押さえると、部屋の出口へ向かった。

「さてと…適当に掃除ってとこだな…」

提督は少しだるそうにしながらそう呟いた。

――――――――――――――――

翔はバイクを走らせていた。カブトの専用バイク「カブトエクステンダー」だ。因みに本人曰く、気付いたらあった。だそうだ。学園都市。最初は信じていなかったがこうなってくると信じざるおえない、と言うより彼はもうこの街に1ヶ月も暮らしているのだ。いい加減現実を見なければならない。

そんな中、彼の近くを通りすぎた青年に違和感を覚える。彼はこの1ヶ月間、少数ながら突如現れた以前自分が戦っていた異形、ワームと戦っていた。結果、彼が助けた人や目撃者が現れたことからいつの間にやら都市伝説と化してしまったのである。

だが違和感はかなり些細なもので常人だったら気にも止めないだろう。それでも彼は気に止めた。だが状況が悪く、バイクに乗っていたためそのまま素通りするしかなかった。

「……」

結局具体的な違和感の正体はわからない。この街は超能力で溢れているのだ。1ヶ月たったとはいえ、慣れないのは当然ととりあえず彼は割り切ることにした。

「さてと…そういや夕飯頼まれてんだ…」

そんなことを考えながら彼は家へ向かった。

提督は動いていた。スクールの下位組織を使って目標の居場所を突き止め、そのまま殺す。彼にとってその程度の作業に過ぎない。今になっては何故こんなことのためにわざわざ自分は動いてしまったのだろうかとさえ思っている。

そんな中彼は標的を発見した。自分の標的を。写真に載っていた人物を…そして先程翔がすれ違った人物が…

「よう！用件分かるか？」

提督は余裕綽々な態度で青年に近づく。青年はぽかんとした様子で答えた。

「いいえ？あなたは？」

「そうか知らねぇならそれでもかまわねぇ…こっちのやることに変

わりはねぇんだからよ！」

能力を使うほどの相手ではない。そう思った提督は腰のホルダーから銃を引き抜き、青年に向かって容赦なく発砲した。

青年は生きていた。提督が銃を取り出したのを見て、すばやく銃の照準から外れたのだ。それを見た提督は心底面白そうに笑った。

「いいな…それぐらいしてもらわねぇと…つりあいねぇよな！」

提督が引き金を引くよりも早く青年は動き出していた。誰もいないような裏路地に、再び乾いた炸裂音が響く。

青年は逃げていた。人通りが多い場所ではない。彼自身あまり多くの人に見られてはいけないのだ。それは暗部組織で活動する提督にとっても同じ。

辺りはもう暗い。ふと逃げていた青年の足が止まる。

「ここなら誰にも見られないね？」

「あ？」

提督の顔が少し怪訝そうなものになる。それはそうだ。青年の顔は追い詰められた人間の表情ではなかったのだから。提督はそれがどうしても不愉快でならなかった。

「おいおい…思考回路ぶっとんだんじゃねぇだろうな」

「まさか…こういうことだよ！」

暗闇の中。青年の輪郭が歪。そう思ったときにはすでにその姿は異形のものへと変わっていた。

「肉体変化(メタモルフォーゼ)！？」

いきなりのことで提督は少し驚く。肉体変化(メタモルフォーゼ)自体は珍しいことではない。つまり彼が驚いているのはそこではないのだ。何故ここまで能力を温存していたのか？何故見られてはいけなかったのか？そして青年の能力が肉体変化(メタモルフォーゼ)だと言う情報が入っていなかったからだ。

そしてそれを見た瞬間得体の知れない何かを感じた提督はすばやく自身の能力である未元物質(ダークマター)を発動させる。それと同時に彼の背中から純白の翼が生えた。

（なんだこの嫌な感じ……普通の肉体変化(メタモルフォーゼ)とは違う…？）

彼はそんなことを考えながら目の前にいる蜘蛛を連想させる異形を翼でなぎ払う。思いのほか異形はそれを受けて数メートル転がった。ここまでは提督の思い描いた通りだが殺すつもりで放った一撃だったが、異形はすぐさま起き上がると、口と思われる場所から蜘蛛の糸のようなものを吐き出してきた。

「おいおい…そんなもんが俺に通用するとか思ってんのか？」

あの攻撃をまともに喰らって生きている時点で、普通の人間とはいいづらいのだが彼自身が普通の人間ではないのでそこまで驚くことなく冷静に異形の追撃に対応する。

その結果、蜘蛛の糸は彼に到達する前に粉々になってしまう。

「異物の混ざった空間…ここはテメェの知る場所じゃねぇんだよ…」

一息ついてから彼は言う。

「俺の未元物質（ダークマター）に常識は通用しねぇ」

これ以上奴から得られるものはなさそうだと彼は結論付け、止めを刺そうとするが、それは第三者が割って入ってきたため中断せざるおえなくなった。

「ワーム…」

それは小さく自分の目の前にいる異形に向かってつぶやいた。乗ってきていたバイクを降りるとそのまま異形、ワームに向かって歩き出す。

「なんだこいつ…」

それは彼らから見たら駆動鎧（パワードスーツ）に見えたかもしれない。だが本人とっては違う。真っ赤な装甲に青い複眼。頭から突き出るカブトムシのような角。マスクドライダーシステムの光を支配せし太陽の神と呼ばれた存在…そしてワームは青年の顔と声を借りて憎々しげにつぶやいた。

「カブト……」

「ハッ！」

同時にカブトのパンチがワームを襲う。ワームはそれをうまく避

けるが追撃の蹴りがすぐさま飛んできたので、それをもろに喰らってしまった。カブトはさらにどこからかクナイのような武器を取り出すとワームを何度も斬りつけていく。その度にワームの肉体からは火花が散っていた。

「フッ！ハァッ！」

ダメージが限界を超えたワームは地面を転がる。それを見たカブトはクナイを投げ捨て、ゼクターに装備されているスロットルをすばやく押し始める。

《ＯＮＥ　ＴＷＯ　ＴＨＲＥＥ》

「ライダーキック！」

《ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ》

「ハァァァ！」

カブトは起き上がろうとするワームに向かって自身の必殺技を容赦なく叩き込む。結果、ワームは跡形もなく爆散してしまった。

提督はその光景を興味深く観察していた。率直に面白いものが見れた。そう言う表情だ。もう先程のだるそうな表情はない。

「お前…誰だ？」

率直な質問だった。だがカブトは答えはしない。真っ青な複眼が提督を捉えたと思ったら腰のベルトについていたボタンを押す。

《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》

その電子音だけだった。それだけでカブトの姿は虚空に消え、彼が乗ってきていたバイクも消え去っていた。

「学園都市ってのはまだなんか隠してやがんのかよ…底が見えてこねぇ…てか底なんてあんのか？って思えてくんなホント……」

その場に残された提督だけがそう静かにつぶやいた。

地球外生命体《ワーム》（後書き）

おそらく次回も翔サイドの話になるかと思います。ではっ！

幻想殺し《イマジンブレイカー》と禁書目録《インデックス》

ワームを撃破したあと、翔は帰路についていた。あの翼の生えた少年が誰かはわからないが、まぁ学園都市だし超能力者だろうと簡単に解釈していた。

あるアパートの駐車場の一角にバイクを止める翔。

（もう遅いし…連絡は一応したけど怒られるかなぁ？）

そんなことを考えていた翔はアパートの階段から降りてくる少年を発見する。それを見た彼は驚いた顔をしながらその少年の名前を呼んだ。

「当麻！？」

「…翔か……？」

少しうつろな目を持ち上げるのは学ランを着たツンツン頭の少年。翔は悠斗関連で彼と知り合いになった、いつも不幸だのなんだの叫んでいて、こんな覇気のない人間ではなかったはずだ。

「どうしてお前がここに？」

翔の質問に当麻は答えはしなかった。代わりなのか、まったく別の言葉が飛んできた。

「俺の幻想殺し《イマジンブレイカー》って女の子一人の怪我も治してやれないんだな…」

「……？」

当麻の言っていることがよく理解できなかったのか、翔は少し首をかしげる。

「悪いな…急に押し掛けて…せめてインデックスの怪我が治るまではいさせてくれないか？」

やはりいつもの彼ではない。だがとりあえずインデックスと呼ばれる女の子が怪我をしてその怪我を治すために自分の家を訪ねた。ということは分かった。

「だけど何でうちに来たんだ？」

「小萌先生なら能力開発を受けていないから回復魔術を使えるかなって…」

「カイフクマジュツ？」

彼が1ヶ月で得たこの学園都市の常識を根本的に覆しかねない彼の言葉に翔は若干困惑するが、所詮1ヶ月。それに彼のもといた世界では超能力と魔術に大差があったわけではないので、すぐに受け入れる。

「やっぱそういうもんあるんだな」

隣でうんうんと頷く翔をよそに当麻は自分の手を握る力が自然と強くなるのを感じた。

自分は無力だ。何が幻想殺し《イマジンブレイカー》だ。何が異能の力ならすべて打ち消せるだ。インデックスを襲ってきたやつは退けられてもインデックスを救えなければ意味が無いじゃないか。

「当麻…」

そんな当麻の考えに気付いたのか、翔はそれだけ言うと隣に座り込む。

何やら部屋の方が騒がしい。回復魔術とやらが終了したのか、小萌が部屋の中から慌ただしく出てきた。

「小萌先生！インデックスは！？」

当麻が食い付く様に問いかけるが、彼女は冷静に答える。

「今は部屋でぐっすり眠っていますよ」

「ありがとうございます！」

当麻は彼女にお礼を言うと、すぐに部屋に向かっていった。

「先生…いったい何が？」

翔はその場に残っていた小萌に話しかける。先生などと呼んでいるが、別に彼は彼女のいる学校に通っているわけではなく呼ぶなら先生をつけろと言われたので、とりあえずそれに従っているだけである。

「それが先生にもさっぱりなのですよ…」

「そうなんですか…じゃあ、俺らも戻りますか」

「そうですね」

そんなことを話ながら彼らは当麻に続くように部屋に向かっていった。

部屋に入った彼らが見たのは白い修道服に身を包んだ少女をホッとした表情で見つめる当麻の姿だった。

「そういやその子誰なんだ？さっきインデックスって言ってた子？」

翔が当麻に話しかける。少し気になったのだろう。翔の声に反応した当麻はインデックスを見たまま話始める。

「あぁ…何でも魔術師に追われてるって…」

「その魔術師ってのはどんなやつだ？」

翔の言葉には少し怒りがこもっていた。何故こんな年もいかない少女かま執拗に狙われなければいかないのか？

「俺が戦ったのは赤髪で背が高い神父みてぇな格好したやつだった」

「よし分かった」

「何が？」

「何があってもこの子を助けるってこと」

「……そうだな」

翔の言葉に一瞬きょとんとした当麻だったが直ぐに笑みがこぼれ、そう言った。

――――――――――――――――――――

「ていうか…何でビール好きで愛煙家の大人な小萌先生のパジャマがお前にぴったり合っちまうんだ？…」

あれから一晩立っていた。小萌は何も聞かずに当麻たちをアパートに泊めていた。翔に関しても特に異論はなかったのですぐに了承している。

「ったく…年齢差いくつなんだか…？」

「さぁな？」

当麻が口にしていたのはそのままだ。中学生程度の年齢の少女に普通の大人の寝巻きが合うとはあまり思えない。翔も苦笑いを交えながら当麻の発現に相槌をうっていた。

「見くびらないで欲しい…私も流石にこのパジャマは胸が苦しいかも」

しかもフードにはウサギの耳ときた。どこから突っ込んでいいのかはもはや分からない。

「ところで上条ちゃん！」

不意に小萌が当麻の名前を呼ぶ。

「はい？」

「この子は上条ちゃんのいったい何様なのです！？」

その質問に当麻はあ若干考えるそぶりをしてから一言答えを言い放った。

「妹…」

「ぶっ！？」

当麻の発現に隣にいた翔は笑いをこらえる事が出来ずに声を漏らしてしまう。

「嘘にもほどがあるのですよ！どこからどう見ても外国人少女です！」

「ごめんなさい！嘘つきました！」

撤回は早かった。

すると小萌は部屋のふすまに手をかける。

「先生どこへ？」

不意な小萌の行動に少し疑問を抱きながら翔は質問する。

「執行猶予です…先生スーパー行ってごはんのお買い物してくるです。上条ちゃんはそれまでに何をどう話すべきかきっちりかっちり整理しておくですよ」

小萌は一度振り返ってそう言うと少し怒った顔でそう言い放ち、外へ出て行った。

「素敵な人だね」

小萌が出て行ったのを確認すると、インデックスはそう言った。確かにいくら自分の生徒とはいえ、あそこまで世話してくれる人はなかなかいないだろう。

その後彼らはインデックスから彼女の事情を聞いた。彼女が所属しているイギリス聖教や彼女の頭の中にある１０万３千冊の魔道書。そして昨日当麻が戦った魔術師に身柄を狙われていることも。

―結局、スーパーから帰ってきた小萌先生は何の事情も聞かずに俺たちをアパートに泊めてくれた。買い物に夢中で忘れたのか、全部忘れていたことにしてくれたのか…それは聞いていない―

そしてその日の夜…

「一応ゼクターを見張りにつけといて正解だったな？」

当麻とインデックスは銭湯に向かっていた。そして翔は目の前にいる女性に向かってそう言い放っていた。

「人払いのルーンはまだ完成していないと言うのに…」

女性は少しため息をつきながら翔とただ対峙している。

幻想殺し《イマジンブレイカー》と禁書目録《インデックス》（後書き）

感想待ってたりします！

聖人ｖｓマスクドライダー

「人払い？」

翔は目の前に対峙している女性にそういった。

「えぇ…どうやらもう完成したようですね」

「？」

翔の質問の答えにはなっていないが女性はそういった。翔は怪訝そうな顔をした後、ある違和感に気付く。

「人が……？」

そう思ったころにはすでにこの場所にいる人間は翔と女性しかいなくなっていた。

「…人…払い…」

信じられないようにつぶやくがそこで翔はあることに気付く。自分たち以外いないと思っていたそこには少年が一人こちらを見て驚いていた。彼は少年の名前を知っている。

「当麻？」

「翔…いったいどうなってんだ？」

翔が自分に気付いたのを確認すると当麻は質問を投げかける。そ

れに対して翔は目の前の女性を見据えながら言う。

「そこの魔術師が言うには人払いとやらを使ったらしいぜ？魔術ってのは何でもありだな…」

「あなたインデックスと同伴していた少年ですか？」

女性は必要あるかどうかも分からない質問を彼にする。当麻は彼女をゆっくり見つめると短く答える。

「あぁ」

「上条（神浄）当麻（討魔）ですか…よい名前です」

女性は彼らの反応など気にしない様子で話を続ける。痺れを切らしたのか翔は情女性に向かって話しかける。

「一応聞くけどあんたはいったい何者なんだ？そして俺たちに何のようだ？」

かなり直球の質問だったが女性は特に嫌な顔もせずに答える。

「神裂火織と申します…目的はインデックスの保護です」

「保護…ねぇ」

何故か女性の言葉に優しさがこもっていることに翔は気付き大きな反応が出来なかった。もしも優しさに気付かなかったらおそらく怒鳴っていただろう。

「何が保護だ！？」

ちょうどこんな風に…ちなみに怒鳴ったのは当麻だ。

「テメェらよってたかってあんな女の子追っかけまわしやがって！」

「…あの子をおとなしくこちらに譲ってくださるならあなた方には危害を一切加えることはしません」

「ふざけんな！」

ゴウッ！…当麻が反論使用とした瞬間、後ろにあった風車の羽が一枚風と共に吹っ飛んでいく。目の前では神裂はた刀を静かに鞘に納めていく。……いつ刀を抜いた？そしていつ攻撃して後ろの風車を破壊した？

「もう一度問います。彼女をこちらに引き渡してくれませんか？」

「な…何言ってやがる…テメェを相手に降参する理由なんざ…」

震える声、震える足で当麻はそう言う。強がりなのは誰が見ても明らかだ。そもそも彼は特別な右手を持っているとはいえ他は普通の高校生だ。命の危険におびえないはずがない。だがそれでも当麻はインデックスを神裂に渡すつもりはこれっぽっちもない。

翔に関しては殺すことが出来たずの攻撃で殺さなかった時点で、先程の疑問が確信に変わりつつあった。がここで問題が一つ発生してくる。もし神裂が心優しいならなぜインデックスを利用しようとする連中に手を貸すのか。嫌そうにそれをしている風にも見えない。疑問が解消できないまま翔は事態を静視していた。

「…何度でも問います…」

神裂がそういった瞬間、刀の柄にそっと手を触れる。その動作だけで二人に向かって地面を削りながら衝撃波のような物が襲う。

「ぐうっ！？」

だがその攻撃は二人の間を通り過ぎるばかり。当の本人たちはまったくの無傷であった。地面には攻撃でえぐられた跡がある。それを生身でまともにくらったらひとたまりもないだろう。

「私の七転七刀が織り成す七閃の斬撃速度は一瞬と呼ばれる時間に七度殺せるレベルです。」

意味が分からなかった。音速だってそこまで速くはない。と言うより人間がそん馬鹿げた速度で攻撃を放てるかどうか事態怪しい。もしもそんな速度だったらクロックアップしてても難しいだろう。ハイパークロックアップならいざ知らず。

「必殺と言っても間違いではありませんが…」

まさにその通りだろう。もし神裂が本気を出していたら自分たちはいったいあの短い時間の中で何十回殺されているのだろうか…？考えるだけでも恐ろしい。

それでも当麻には唯一の希望があった。それは自分の右手、幻想殺し《イマジンブレイカー》。どんなに攻撃が早かろうとそれが異能の力なら、問答無用で打ち消すことが出来る。だが彼女と戦う場合、問題が発生してくる。

「報告は受けていますよ…あなたの右手は何故か魔術を無効化する…ですがそれはあなたが右手で触れない限りは不可能ではありませんか？」

だがそれを聞いても当麻の気持ちは揺るがない。右手の拳を握ると当麻は神裂に向かって一直線に走り出した。

「馬鹿！お前！？」

翔が叫ぶがもう遅い。神裂の放つ七閃が当麻の行く手を阻み、攻撃を中断させる。

「ぐわっ！？」

当麻は吹き飛びそうになるが、自分の両足で地面を踏みつけどうにか踏みとどまると、再び神埼に向かって走り出した。

彼の右手が神裂を捉えようとしたその瞬間。七閃がかれの「右手」を容赦なく切り刻んだ。

翔の思考はそこで吹っ飛ぶ。目の前で友達が傷つけられた。戦うには十分すぎる理由だった。

「変身！！」

翔はすばやく飛来したカブトゼクターをいつのまにか腰に巻かれていたベルトへとスライドさせ、それと同時にゼクターホーンと呼ばれるゼクターの角を反転させる。

《ＨＥＮＳＨＩＮ》

《Ｃｈａｎｇｅ　Ｂｅｅｔｌｅ》

翔のからだが赤い装甲に包まれるとその姿は、カブトへと変わる。そしてカブトの青い複眼がまっすぐ神裂を見据える。彼の頭の中にあった疑問はもはや二の次と化していた。

《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》

ベルトの横についているボタンをすばやく押すと電子音と共にカブトの姿が見えなくなる。彼女に七閃を使わせる隙を与えずに倒す。それが最良の手段だ。

誰の動きもゆっくりになってしまう。そんなハイスピードカメラの中にいるような世界でカブトはまわりに展開されているワイヤーを手に持つクナイでワイヤーを切断する。クロックアップして気付いたことだが彼女の七閃はこの極細のワイヤーによって成り立っている。ならばそのワイヤーを全てではなくとも切断していけばその効力を失うはずだ。

そして彼は気付いた。ライダーとワームしか入り込めないはずの世界の出来事を彼女は理解し、すばやくカブト本人に打撃を与えようとしている。その光景は決してスローではなかった。

そのことに驚く彼だが感覚ごとハイスピードになるクロックアップのほうが勝る。彼女の攻撃を避けた彼は打撃を与える。加減はした。だが手数は多い。

《ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ》

「くっ……！？」

神裂の顔がはじめて苦痛に歪む。そして一息ついて冷静になったカブトはこういう。

「あんた…こんなことする必要ないだろ…？あんたは今多分心のどこかにわだかまりを感じている…そんな人間がこんなことする理由はない。だけどあんたはこんなことやってる……それには何か理由があるんだろ？」

「あなたはいったい何者ですか……？不意をついたとはいえ聖人に打撃を加えるなんて……」

神裂の質問に彼は答えない。

「あんたは多分優しい人だ…そんな人がこんなことするとは思えない…」

そんな彼を見て神崎は一息つくとこういった。

「私が所属しているのはイギリス聖教、必要悪の教会（ネセサリウス）です」

必要悪の教会（ネセサリウス）…それはインデックスの所属する組織の名前だ。

完全記憶能力（前書き）

今回は少し短めですかね

完全記憶能力

「どう言う……ことだよ……？」

倒れていた当麻はゆっくりと起き上がりながら、神裂に聞く。彼女は言った。自分の所属する組織はインデックスと同じものだと…。

「インデックスは私の同僚にして親友です…」

「ちょっと待てよ！？同じ組織に所属してんならどうして敵としてあの子のところに！？」

カブトは変身を解除しながら声を荒げる。彼の言うとおり同じ組織のいるなら何故敵としてインデックスの前に現れたのか？

「そうやって保護しないと彼女は生きていけないからです…」

神裂は今までの無感情の声から一転、不安を口にする弱々しいものに変わっていた。

「生きていけない？」

神裂の言った言葉をそのまま聞き返す当麻。何故わざわざそんな遠回りをしていかなければ生きていけないとはどう言うことなのか？

「完全記憶能力…それが全ての…元凶です……！」

吐き捨てるかのように言い放つ神裂の言葉に二人は耳を傾ける。

「完全記憶能力って…十万三千冊のことか？」

当麻は神裂にそう聞く。普通の人間だったら十万三千冊の本など暗記できるはずがない。ましてや一冊分を一字一句完全に記憶するのでさえ不可能に近いし、たとえ出来たとしても相当の揚力と根気が必要になってくる。だから彼らは魔術でそれらを叩き込まれたと思っていた。

「人間の脳の要領は意外に小さい…ですが、いらない記憶を忘れることで、知らないうちに脳を整理している。だから人間は生きていける…ところが…彼女にはそれが出来ない…」

そこまで聞いた翔は少し怪訝な顔をする。何か自分の持っている知識とずれがあるような気がする。だが神裂はそんな翔には気付かず話を続ける。

「街路地の葉っぱの数から…ラッシュアワーであふれる一人ひとりの顔…雨粒の一滴一滴の形まで…彼女の記憶はそんなどうでもいい記憶であっという間に埋め尽くされてしまう…」

「ちょっと待ってくれ！何であんたたちは敵としてインデックスの前に現れたんだ？あいつが勘違いしてんだったらそれを……」

当麻の言葉はそこで止まる。完全記憶能力…そんなものがあるなら何故インデックスは一年から昔の記憶がないのか？それに気付いた当麻は言葉をつまらせる。神裂はそれに気付いたのか、その答えを提示した。

「彼女の記憶は私たちが消しました…そうしないと彼女は生きていけないからです…」

「生きて……いけない……？」

当麻は信じられないかのように唖然と言葉を繰り返す。

「えぇ…彼女の脳の８５％は十万三千冊の記憶に使われてしまっているため、残りの１５％しか使うことが出来ないのです…」

「は？」

そこまで聞いた翔の口がぽかんと開く。

「何言ってるんだ…あんた……？」

次に翔から出てきた言葉はそれだった。そのことに神裂は少しムッとした表情をするが、翔は構わず続ける。

「脳は知識と記憶は別々の場所に保管する。だから知識である魔道書の量がどれほど多かろうが、それが記憶を圧迫するなんてありえない…だいいち人間の脳の容量がそんなもんなら学園都市のレベル５たちは高度な演算をするだけでおじゃんだよ…」

月詠小萌から聞いていた能力者に関する知識と事前に持っていた知識をフルに活用して翔はそういった。

当然神裂は信じられないような顔をする。

「そんな…しかし彼女は実際に一定の時期に体調を崩して……！」

「それこそ魔術なんじゃないのか？」

「ッ…！？」

どうしようもない事実。

それを突きつけられた神裂は動揺を隠せない。隠せるはずがない。今まで自分たちがしてきたことを根本から覆されようとしているのだから。

「あんたたちは多分必要悪の教会（ネセサリウス）にだまされている…理由は分からないけどそれを調べるのはあんたたちだ」

その言葉に神裂は一瞬反応する。

「つまり…あれか？」

だが言葉を返したのは当麻だ。

「教会はこいつらに嘘をついてその嘘を信じ込ませてありえないはずの悲劇を繰り返させていたと…！」

希望はある。そう思った当麻はうれしさ半分。その一方で彼女らにこんなひどいことをさせるまで追い込んだ教会に対する怒り半分。そういった様子で彼は言葉を発した。

このインデックスの記憶を消さなければ生きていけないというあまりに残酷すぎる無限ループを抜け出す希望が見える。

だが希望が見えただけでは何も変えることはできない。形のない希望を形にしなければ…そして形のない希望は形のあるものへと変

わろうとしていた。

――――――――――――――――――

状況は一変する。当麻たちを襲った炎を使う魔術師、ステイル＝マグヌスも神裂と同じ理由でインデックスを追っていた。そして後にそのことはインデックス本人にも知らされることとなる。

本人も最初は驚いた様子だったが、以外にあっさり信じたのは、やはり境遇が普通ではなかったからだろうか…

「そうなんだ…イギリス清教がそんなことを私にしてたんだね…」

インデックスはうつむき加減でそういった。

「詳しいことは調べてみないと分からないけど…神裂たちはタイムリミットは今日の０時までっていってたな」

タイムリミット…それはインデックスの記憶を消さないで生きていける時間。医学的にありえないが魔術がそれを現実にしてしまっている。どこでどんな風に発動しているか分からない以上、幻想殺し《イマジンブレイカー》でその魔術を打ち消すことは出来ない。

「……短いな……」

当麻はため息混じりに言う。あと数時間で何をすれば良いのか分からない状況ではあまりに短すぎる。神裂たちも何もしていないわけではない。自分たちの視点からインデックスを圧迫している魔術を割り出そうとしているのだ。

彼らはインデックスを救う。その目標に向かって動いていた。

完全記憶能力（後書き）

感想待ってます！

幻想御手《レベルアッパー》（前書き）

今回は悠斗サイドの話ですね

幻想御手《レベルアッパー》

時は少しさかのぼる。悠斗が少女を助けた日と翔がワームを倒し、当麻たちとあった日には間がある。そして悠斗はその数日間に大きな事件に巻き込まれる事となる。

「んっ……」

暇なのか、昼間から大きく背伸びをする悠斗。夏休みに入ったのはいいのだが、する事もなく暇をもて余しているのだ。

そんなわけで彼はアイスでも買いに行こうかと、外に出ることにする。部屋には自分以外誰もいなかったので戸締まりなどを確認すると、彼は外に出る。

「あっちぃ……」

外に出てから一番最初に言った言葉がそれだった。夏も本番なので暑いのは分かるのだが、これだとダメ人間に見えてならない。当然本人はそんなこと気にする訳でもなく能力を使って自分の周りの温度を下げる。

ここで一つ訂正がある。先程彼を「ダメ人間に見えてならない」と表現したが、これは完全なダメ人間だ。

「うまいアイスは何処で売ってっかなぁ～？」

そんなことを呟く悠斗。もうお分かりの読者もいるだろう。彼はアイスが大好物だ。そして夏が大嫌いだ。それが彼の氷結水龍（フリーズドラゴン）の能

力に関係あるのかは不明だが…というより彼の好みの問題なのだから関係はないだろう。

「古澤悠斗さんですの？」

家を出てから数十分。不意に自分の名前を呼ぶ声がする。

「ん？」

その声が聞こえた方を振り向くと常盤台中学の制服を着た少女が二人いた。彼に常盤台の知り合いはいない。だが片方は見覚えがあった。

「あ…お前あのときの風紀委員（ジャッチメント）…」

「えぇ……白井黒子と申します」

若干驚く悠斗だが、白井は表情を崩さない。

「用件はお分かりでして？」

「いや？全く…」

「そうですが……あなたのレベルは2ということでバンクに登録されていましたね」

「何が言いたい？」

先程のおちゃらけ感はどこ吹く風。悠斗は少し敵意を白井に向けながら冷静な口調で言う。それでも白井の態度は変わらない。

「そうですわね…貴方はレベル2でありながら私を助けた時には明らかにレベル2以上の力を使っています…幻想御手（レベルアッパー）と言うものはご存知ですか？」

「レベルアッパー…？あぁ…あれか…能力を上げる不思議なアイテムがあるっていう都市伝説」

彼はレベル2でありながらレベル2以上の力を使っている。そして世の中には気軽にレベルを上げられる幻想御手（レベルアッパー）なるものがある。つまりだ。

「……俺がその幻想御手（レベルアッパー）を使って能力を上げているって言いたいのか？」

「えぇ…そしてできれば善意のあるご協力をお願いしたいのですが……」

遠回しの脅迫だ。協力しなければ業務執行妨害かなにかで捕まえるぞコラ…っという事である。だが彼は幻想御手（レベルアッパー）など噂程度しか知らない。それにこんな恩を仇で返して来るやつに協力するつもりもない。

「断る……そもそも俺は幻想御手（レベルアッパー）なんて使ってないし助けてやったのを疑いで返して来るようなやつと協力しようとは思わないな」

「ッ…！あんた何言ってるかわかってんの！？」

悠斗の言葉を聞いて黙っていられなくなったのか短髪の少女が声を荒げてきた。彼はめんどくさそうにそれに対応する。

「うっせぇな…だから幻想御手（レベルアッパー）なんて使ってねぇっつってんだろ？」

「いいわ…だったらあんたのそのねじ曲がった根性片っ端から叩き直してあげる！！」

「お…ぉ…お姉様……？」

白井が若干怯えながら短髪少女を止めようとするが、その前に少女の前髪辺りからバチバチ…！っと電気を帯始める。

「……くらえぇ！！」

「ッ！？」

次の瞬間、少女の前髪から電撃が悠斗目掛けて放たれる。彼は電撃が放たれる直前に咄嗟に能力で氷の壁を目の前に作り、電撃を防いだ。

「っぶねっ！？」

悠斗は目の前で砕けた氷の壁を見ながら冷や汗をかく。そして同時に思い出す。常盤台の最強の電撃使い《エレクトロマスター》を…

「まさか……超電磁砲（レールガン）！？」

悠斗は相手から大きく距離を取る。自分はレベル５だ。だが相手もレベル５だ。そして彼はまだ同じレベルの相手と戦ったことはない。その未知数さが重なり、彼に必要以上に距離を取らせた。

「私の名前は御坂美琴…」

御坂はもはや止まりそうにない。そう思った悠斗は何ヶ月ぶりかわからないくらいだが、能力を本気で使うことにする。

「さて……ちょっとおいたが過ぎるぜ…ガキが…」

「ッ！？」

悠斗の安い挑発に乗って御坂は雷撃を飛ばす。だがそれは悠斗の作った氷にぶつかり受け流される。先端が尖っていたのだ。それで御坂が放った電撃を効果的にそらしたのだ。

「さてと……」

先程御坂の攻撃で破壊された氷の残骸がふわっと浮き上がり、そのまま御坂に向かって勢いよく動き出す。

「当たるか！」

すると御坂は先程よりも広範囲に電撃を飛ばし、氷を粉々にしてしまう。だが一息つく間もなく次々と氷の塊が御坂に向かって飛んでいく。空気の中に含まれる水蒸気。それがあれば彼は自分の武器を作り出すことが出来るのだ。

「クソッ！？」

ズガガガガガガッ！！悠斗が大量に作った氷をひたすら御坂が破壊していく。一つ一つではない。一回で数十個同時に作られ同時に破壊していく。それが瞬きすら許されない速度で続いている。もはや常人に入り込める領域ではなかった。

「これはきりがないな……」

悠斗はそう呟くと一旦攻撃を中断する。そう。このままではずっと平行線を辿っているだけになる。一応こちらが攻める側てばあったが、それがいつまでもつかわからないし、打開策を発見される可能性もある。

「ハァ…ど…どう？大人しく協力する気になった？」

それを諦めたととった御坂は息を切らしながらも笑みを見せる。

「いいや？このままじゃ長引くかなぁ…って別の手に変えるだけ…」

彼女らは辺りの空気が冷えて行くのを肌で感じる。気のせいではない。嫌な予感などで感じる寒気でもない。本当に回りがの気温が冷えているのだ。

バキバキバキ……！突然なった音に振り向くと、空中に氷で何か作りあげられている。それは少しずつ形が見えてくる。それと同時に水がまるで生きているかの様に動きながらその氷と同じ場所で同時に作られていく。見えてくる全体像はまるで…

「龍……？」

氷の顔に水の胴体。そんな龍が彼女達を睨み付ける。

「これが俺の能力…氷結水龍（フリーズドラゴン）……因みに水の方は液体窒素…少なくとも－１８３℃以下だから触っただけでもまずいぜ？」

「ッ……！？」

その龍の威圧感は圧倒的だった。何もかも飲み込みそうな威圧感は彼女らを金縛りにあったかの如く動けなくする。だが御坂は違う。彼女は仮にもレベル5。そう簡単ではない。

「行くぜ！」

彼の合図と共に氷の龍は一直線に御坂へ向かっていく。それに対して御坂はポケットからコインを取り出し、狙いを定めると、叫ぶ。

「―吹っ飛べ！」

次の瞬間、彼女の通り名にもなっている超電磁砲（レールガン）を音速を越える速さで打ち出し、命中させる。

音を立てて崩れる氷の龍。だが悠斗の表情は何一つ変わらない。

「――甘かったな？」

悠斗の声がやたら鮮明に御坂の耳に届く。その瞬間後ろから唐突に襲いかかる氷の龍。目の前の一体目はおとりだったのだ。

「しまっ――――」

気付く頃にはもう遅い。氷の龍が容赦なく御坂を飲み込む。一瞬で御坂が立っていた場所は巨大な氷に包まれていた。

「お姉様！！」

白井が叫ぶが返事はない。彼女はすぐにでも悠斗を捕まえようと思うがその前に声が聞こえる。

「うっ……く…」

御坂の声だ。よくよく見ると、綺麗に御坂がいる場所は凍っていない。彼が調節したのだ。彼だって人殺しになってあのうるさい黄泉川に追いかけられるような事にはなりたくない。

「お姉様！？大丈夫ですの！？」

「なんとかね…」

彼女らのやり取りを見て一息つくと、悠斗は話し出す。

「……幻想御手（レベルアッパー）の事件…手伝ってやる……濡れ衣着せられたまま黙ってられねぇし何よりバレたら黄泉川がうるさそうだしな」

能力を使い、氷をどけると二人に一言。勿論二人は驚いたが、悠斗は気にせず。

「まぁそんなことより…俺の勝ちかな？」

台無しにした。

幻想御手《レベルアッパー》（後書き）

因みに悠斗の実力は3位以上2位未満って感じてますかね

感想待ってるんでよろしくお願いします！

（'◇'）ゞ

幻想御手《レベルアッパー》の正体

「ここが私たち風紀委員（ジャッチメント）の支部ですの」

白井に案内されて入ったのはある建物の中にある部屋の一つ。そして回りを見渡して一言。

「男いなっ！？」

そう。この支部のメンバーに男性はいない。それどころか固法と呼ばれる少女以外全員中学生だった。

彼は自分の軽率な行動を今ここで激しく後悔した。

「その人誰？」

固法が白井に聞く。当然だ。彼女らにとって彼は部外者以外の何者でもないのだから。

「幻想御手（レベルアッパー）事件の協力者ってとこかな？」

ニコッではなくニヤッと笑いながらそう答える悠斗。その事に固法は少し目を細めるが、一緒にいた白井と御坂が否定しないのを見て、とりあえず了承する。

「ちょっと濡れ衣着せられてな…一応疑いは晴れてないから晴れるまで協力してやろうかなってな」

一応理由を言って、信頼を少しでも上げようとする。流石に疑わ

れたまま協力するなんてのは嫌だ。

そんなわけで無事に彼女らの仲間入り?を果たした彼は科学サイドの事件へ大きく首を突っ込んで行くことになる。

「これが幻想御手(レベルアッパー)の現物よ」

固法が悠斗に何処にでも売っていそうなミュージックプレイヤーを見せる。

「音楽プレイヤー?」

ついそれを見て首を傾げる悠斗。幻想御手(レベルアッパー)に関して噂程度の知識しかない彼にはそれがどういった物かは全く検討もついていなかった。

悠斗をまだ警戒しているのか奥の方の椅子に座っている、大きな花飾りを乗せている少女は首を縦に振り、肯定する。

「幻想御手(レベルアッパー)は曲なんです」

「曲……ねぇ……」

悠斗は信じられないといった様子で音楽プレイヤーを起動させる。その画面には“Ｌｅｖｅｌ　Ｕｐｐｅｒ”と書かれている。

「と言ってもまだ分からないことだらけなんですけどね」

「しっかし……噂のアイテムの実態はただの音楽！ってか?」

悠斗は冗談交じりに言うが、その本質が分からない以上否定できないところが怖い。

「木山先生の話では…短期間に大量の電気的情報を脳に入力するための学習装置（テスタメント）と言う特殊な装置もあるそうですの……でもそれは視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感全てに働きかけるもので…」

「幻想御手（レベルアッパー）はただの音楽ソフト…聴覚作用だけね……」

白井の言葉を御坂がつなげる。幻想御手（レベルアッパー）の実物は分かるもののその実態はまるでわかっていない状態だ。

だが御坂はそこまで言うと何かに気付いたように言葉を発し始めた。

「仮の話なんだけどさ…曲自体に五感に働きかける作用がある可能性はないかな……？」

「共感覚性ってやつか？」

御坂の言葉に悠斗はそう言う。共感覚性…それを利用したものは日常の中にたくさんある。例えば風鈴。音を聞くだけで気持ち的に涼しくなるように錯覚するアレだ。

――――――――――――――――――――――――

「……の方向で調査を依頼したいのですが」

花飾りの少女、初春が誰かに電話をしている。木山晴生と呼ばれる協力者だそうだ。

『なるほど…それなら樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）の許可も下りるだろう』

「本当ですか！？学園都市一のスーパーコンピュータならすぐですね！？」

『結果が出たら知らせるよ』

「じゃあ…今からそっちに行っても良いですか？樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）を使うところ私ももて見たいんです！」

『あぁ…構わんよ』

プッッ！そこで電話は途切れたらしい。初春はすぐに部屋を後にすると木山の下へと向かった。これから起こることも知らずに…

「佐天さんも幻想御手（レベルアッパー）を……」

御坂たちは病院に来ていた。何でも友人が意識不明になってしまったらしい。…原因は彼女が言っている通り、幻想御手（レベルアッパー）。

「えぇ…絶対データを解析して佐天さんを助けるんだって初春は木山先生の所へ…」

「幻想御手（レベルアッパー）を使った奴って全員こうなるのか？」

悠斗は表情を暗くしながらいう。彼も、友人が意識不明などという状態になっている彼女らにへらへらしながら声をかけるほど無神経ではない。

「そうですの……でもそうなるとあなたが意識不明にならない訳は…？」

「いやっ！？だから俺使ってないから！？」

未だに疑っている白井に対してツッコミ的なノリで反論する悠斗。先程は暗かったが、結局この場を和ませることにする。おそらく白井もそのために言ったのだろう。……とは言い切れない……。

「黒子…ちょっといいかしら…」

御坂は白井を呼び、どこかへ行ってしまう。そしてここには今も眠っている佐天と呼ばれていた少女と、彼しかいなくなってしまう。彼は少女を見ると自分の無力感にさいなまれる。きっと彼女たちも

同じ…いや、もっとつらいかもしれない。

ダンッ！気付くと彼は拳を壁に叩きつけていた。

少しすると彼女たちも戻ってくる。そして三人の前にここの医師らしきカエル顔の男性が話しかけてきた。

三人に見せたのはパソコンの画面。

「これは…幻想御手（レベルアッパー）使用者の全脳波パターンだ」

それを見た悠斗はあることに気付く。

「同じ…？」

「そう」

カエル顔の医者は肯定する。

「脳波パターンは一人一人違うはずだから同じ波形なんてありえないんだね…ところが幻想御手（レベルアッパー）被害者には共通の脳波パターンがある気がついたんだよ」

「どういうことですの？」

白井の質問に、カエル顔の医者は淡々と答える。

「誰か他人の脳波パターンで無理やり脳が動かされているとしたら人体に多大な影響が出るだろうねぇ…」

「つまり無理やり脳をいじられて植物状態になったってこと？」

「誰がなんのつもりで…」

驚きを隠せない三人を見ながらカエル顔の医者は言う。

「僕は医師だ。それを調べるのは…君たちに役割だろう？」

幻想御手（レベルアッパー）の謎はまだ完璧には解明できていない。だが糸口は確実につかめた。やることも決まっている。彼女らが病院から出て行くのにそう時間はかからなかった。

幻想御手《レベルアッパー》の正体（後書き）

幻想御手（レベルアッパー）って何回打ち込んだんだろう…と思ってたら案外そうでもかったかも？

感想いつでも待ってます！

多重能力《マルチスキル》（前書き）

ギ…ギブミー感想……！

翔「あ…作者倒れた」

悠斗「ほっとけ」

多重能力《マルチスキル》

ここは風紀委員（ジャッチメント）177支部。白井たちの支部だ。つまり彼女らは戻ってきたということだ。

「特定の人物の脳波パターンが分かっているなら…」

「初春に書庫（バンク）の検索をしてもらえば……」

御坂に続いて白井が言うがそれには一つ欠点がある。

「そいつどっか行ったんじゃなかったか？」

悠斗がそう言うと二人は思い出した後、おもいっきりうなだれた。

「まったく…何を騒いでいるの？」

そこに話しかけてくる人物が一人。固法だ。

「あぁ……ちょっとな……」

別に隠す必要はどこにも見当たらないので一同は固法に事情を話す。

「なるほど…そう言うことなら書庫（バンク）へのアクセスも認められるでしょうね」

固法はパソコンのキーボードをすばやく叩いていく。書庫（バンク）へのアクセスは成功したらしい。

「でも…なんで幻想御手（レベルアッパー）を使うと能力が上がるんだろう…？」

誰もが感じている疑問。誰かの脳波パターンが無理やり脳をいじったところでそれが能力の向上につながると聞かれたら答えはノーだ。それに音楽だけでそんなことが出来るかどうか自体が怪しいのだが、実際に証明されてしまっているので、いまさら疑う余地はないのだが。

「パソコンだって周辺機器とつないだからって性能が格段に上がるわけではないでしょう？ネットワークにつながっているならいざ知らず…」

「ネットにつなぐと性能が上がる？」

固法の言葉に首をかしげる悠斗。確かにネットワークにつながったからとはいえパソコンの読み込み速度が上がるわけではない。

「個々の性能が上がるわけじゃないわ、いくつものコンピュータを並列につなげば演算能力が上るわ…もしかしたら幻想御手（レベルアッパー）にも同じことが言えるかもしれないわね……」

「なるほど…他の人間に自分の能力の演算を手伝わせてるって訳か……」

悠斗の言葉に固法は黙ってうなずき、彼はさらに続ける。

「…それで、演算の手伝いは基本的に植物状態になっている奴らがやらされてるって寸法かよ…ったく…無茶苦茶だろ…」

「あくまで仮説だけれどね」

悠斗の導き出した結論に対して固法は釘をさす。その話はまだ実証されていない。仮説の域を出ないのだ。

「でた！一致率９９％！」

そしてそんなことを話しているうちに固法がついにその脳波パターンとほぼ一致する人間を発見する。一同は一斉にパソコンの画面に視線を向けた。

「これは……！？」

「木山…春生って確か…！？」

流石の悠斗も動揺を隠せない。そして彼女たちが焦る理由は他にもある。

「初春が…」

「警備員（アンチスキル）に連絡！ただし人質がいる可能性有り！」

「はい！」

固法の言葉を聞いて白井はすぐに携帯電話を取り出し、電話をかけ始める。

「くっそ！そいつは今どこにいんだよ！」

悠斗はそこまで言うと何かに気付いた様に携帯電話を取り出すと、おもむろに誰かに電話をかけはじめた。

『悠斗か？』

コールが何回か鳴った後、聞こえてきた声の主は奇妙な知り合いその1。またの名を天道翔という。

「一つ頼みたいことがあんだけどいいか？」

『内容によるけど？』

悠斗の声に緊迫を感じ取った翔は少し口調を真剣なものにしながら答える。

「そうか…じゃあ、木山春生って言う人物のこと調べてくんねぇ？失敗した実験とか…ハッキングとかでいい…」

『どういうことだ？』

「前にな…聞いたことあんだよ…その名前……間接的だけどな…」

『……わかった…』

悠斗の言葉にはやたら不自然なところが多かったが翔は特に追及もせずに了承する。

「頼む」

『あぁ…任せとけ』

プツッ！そこで電話は切れた。ゆっくり携帯をしまうと彼は顔を

上げる。正直、彼の素性を知っている人間は、彼の能力を知っている人間よりも少ない。

だがそれを言及するのは今ではない。それに御坂たちには今の話は聞こえていないし、聞こえないような場所で話していた。

「警備員（アンチスキル）が木山の場所を突き止めたわ！現在車を使って移動中。今道路を封鎖して木山を拘束…」

固法はパソコンに送られてくる映像を見ながらそこまで言うと、急に黙り込む。何事かと御坂と白井は固法の見ている画面に視線を向ける。

そこに映っていたのは警備員（アンチスキル）を圧倒する木山の姿。しかもそれは現代兵器によるものでもなければそこから動いている訳でもない。

「…能力者！？しかも複数の！？」

「二重能力（デュアルスキル）……！？」

「……速く行くぞ！この場所教えろ！」

ただ唖然とする彼女たちは悠斗の一言で我に帰る。自分たちはここで止まっている訳にはいかない。

「えぇ…場所は――」

現場についた御坂が見たのは気を失い、倒れている警備員（アンチスキル）の人間や横転しているトラック。

白井は怪我をしているため支部に残してきた。悠斗は何故か今ここにはいない。だがそれは今問題にすることではない。

「木山春生……」

御坂が呟いた名前の人物。それが今一番対処するべき問題だ。

「二重能力（デュアルスキル）……どうやってやってるか知らないけど…負けはしないわよ…」

敵意を露にしている御坂に対して木山は冷静に答える。

「理論上不可能とされているあれとは方法が違う……言うなれば…多重能力（マルチスキル）」

「呼び方なんて関係ないわ…」

振り向きながら答える木山の左目は赤く充血している。それに対して御坂は特に気にすることもせず、電撃を木山に向かって放つ。

「こっちのすることに変わりはないんだから！」

御坂の放った攻撃は木山に向かって飛んでいくが、それは黒い半透明な球体に阻まれてしまう。これも多重能力（マルチスキル）の中にある能力の一つなのだろう。

「えっ！？」

だがそれだけでは終わらなかった。木山はすでに御坂の視界にはいないのだから。

『複数の能力を同時に使うことは出来ないと踏んでいたのか？』

どこからか聞こえてくるのはノイズ交じりの木山の声。そして声の聞こえてくる方向を見た御坂はすばやくその方向を見ると、ある

のは警備員（アンチスキル）無線機。

『君はレベル5第3位だ。いくら多重能力（マルチスキル）と言えどそれに勝てる保証はない…悪いがここは引かせてもらうよ』

ゆっくりとした口調で言う木山に対して講義をかけようかと思った御坂だったがその前に無線機から他の声が聞こえてくる。

『多重能力（マルチスキル）ね…』

悠斗の声だ。当たり前だが彼にそんな傍受能力はない。つまりこれは能力ではなく無線機を拾って普通に話しているだけだ。

「ちょっ！？あんた今までどこにいたのよ！？」

御坂の声を無視して悠斗は話し始める。

『木山春生……どこかで聞いたことあったんだよな……』

そこで御坂の耳には会話は届かなくなる。無線機からはただ雑音が聞こえるだけだ。

「ちょ！？蚊帳の外かよおぉぉぉぉ！？」

御坂の声がその場に響き渡る。

「……君は……？」

一方木山は目の前にいる少年、悠斗に向かって話しかける。悠斗は適当に無線機を投げ捨てると答える。ただし質問の答えではない。

「小、中学ん時にやたらなついてくる奴らがいてな……」

少し目を伏せながら悠斗は続ける。小学校と言っても高学年だが。

「そいつらは置き去り《チャイルドエラー》だった…」

木山は何故かその話は他人事の様には思えなかった。

「だけどある日を境にそいつらからの連絡がぷっつり途絶えたんだよ……その前にな、新しい担任の先生は凄くいい人だってばか騒ぎしやがんだ…電話越しでな」

「いったい…何の話を…？」

彼女は薄々気付いていた。だが聞かずにはいられない。彼女の目的に関わる話の可能性があるのだから…。

「その担任の名前は木山先生だってな……たまに会うときも電話越しでもいつもそのはなしばかりだった…」

木山はハンマーで頭をおもいっきり殴られた様な衝撃を覚える。

「き……君は……」

木山の声が震える。だが彼は止まらない。

「そして貴女に一つ聞きたいことがある…」

悠斗は木山の返事を待たずして更に続ける。彼女がショック状態

から抜け出していないにも関わらず。

「この実験のこと…貴女は知っていたんですか？」

見せたのは携帯の画面。何かの実験の内部資料。木山の顔は更に真っ青になっていく。

「表向きはＡＩＭ拡散力波の制御実験……だけど実態は…」

「能力の暴走誘爆実験……！」

悠斗の言葉の続きを木山は絞り出す様な声で続けた。

「貴女はその事を知っていたんですか！？」

悠斗は声を荒げる。冷静に話を進めようと思っていたのだがこの怒りだけは押さえるのは無理だ。

「知っていた訳がない！！知っていたら止めていたさ！」

「だったら今あんたはいったい何をやっているんだ！？」

「止めないでくれ！もうすぐなんだ！もうすぐ……！」

「ふざけんなあぁぁぁ！！」

もう我慢できない。彼女は幻想御手（レベルアッパー）の中に自分の生徒を救う何かを見いだしているのかもしれない。だが悠斗にはそれがどんなものかは分からない。だけど一万人もの不幸を犠牲にして成り立つ救いは救いではない。ただの暴走だ。だから止める…全力で…木山を……。

多重能力《マルチスキル》（後書き）

因みに後付け設定だろこれ！？とか思ったそこのあなた！地味に後付けではなかったりする

翔のハッキングとか悠斗の過去とか……

翔「どうでもよくないか？」

よくない！

悠斗「いや…どうでもいい」

幻想猛獣《ＡＩＭバースト》（前書き）

結局感想来なかった…

翔「だって俺の出番少ないから…」

悠斗「それは関係ないと思うぞ？」

翔「マジ！？」

とりまマジじゃね？

翔「……」

悠斗「本気でそう思ってたのか！？……まぁいいや……作者も感想無いから自分の作品がどう評価されてるのか分かんないからな…」

翔「ダメ出しでも何でも良いから感想あげてやって下さい。宜しくお願いします！」

幻想猛獣《ＡＩＭバースト》

悠斗は手に氷で出来た刀を握ると一気に木山へと近づく。

「ラアッ！」

彼が降り下ろした刀は木山へ届くことなく空を切る。自分が認識した場所よりも後ろにいる。

「偏光能力（トリックアート）…！」

「たった一回でよくわかったな…」

「前に一度相手したことがあってな！」

悠斗は光の屈折の誤差を元に戻すために氷を自分の目の前にはる。

「これでもう目眩ましは効かねえぜ…？」

グワッ！っと地面を固めていたコンクリートが突然彼の目の前に巨大な壁を作る。

「なんっ！？」

悠斗は刀の切れ味を上げてコンクリートの壁を切る。だがその先に木山はいない。考えられるのは一つ。空間移動（テレポート）だ。

「……ッ！？」

突然悠斗は振り向きながら同時に氷で作った即席の鎗を後ろに向かって投げる。

「……よくわかったな…」

そこには木山が警備員（アンチスキル）などの戦闘の時に出た瓦礫を盾にしながら立っていた。

「そういう勘は鋭くてね」

刀を構え直しながら悠斗は言う。彼は基本的にどうしても自分のレベルを隠して戦いたい時は、こうして刀とちょっとした能力と体術で戦う。御坂の時は少し頭に来ていたので全力に近い状態で戦ったが…。

それに基本的に相手が人間である場合は基本的には刀に切れ味はない。

「厄介だな…」

「それはこっちのセリフだな…卑怯だろ多重能力（マルチスキル）とか……」

大分冷静さを取り戻している悠斗は自分の能力、氷結水龍（フリーズドラゴン）を使うかどうか迷っていた。彼は研究者という人種が大嫌いだったりする。それはちゃんと理由があるのだが今ここで話すことではない。

だがこのままでは正直木山には勝てないだろう。まだレベル３程度の力しか使っていない。どうにか食らい付いてはいるが、このままでは負ける。

「……」

それでも彼女の幻想は止めなくてはならない。

ゴウッ！

突如木山に向かって電撃が放たれる。彼女はそれを最初にやったように防ぐと、目だけを動かして電撃が飛んできた方向を見る。

「御坂美琴……」

「ったく…私だけ蚊帳の外に放り出してんじゃないわよ」

そう言いながら御坂は再び木山に向かって電撃を放つ。それと同時に悠斗は木山向かって手に持っていた刀を投げつけた。

「無駄だと言うことが分からないのか？」

木山は再び瓦礫で電撃と刀を受け止める。いちいち別の能力で防ぐより、同じ能力で防いだ方が簡単なのだ。

そこまでして木山はあることに気付く。悠斗は氷の刀を再び作り手に持っている。だが御坂がいない。

「俺の相手は詰めが甘くて助かる」

ガシッ！っと木山は動き出す前に何かに抱きつかれる。御坂だ。

「ゼロ距離の電撃…あのバカには効かなかったけどまさかそんなトンデモ能力まで持ってないわよね…」

「――ッ！？」

木山が何か能力を発動する頃にはもう遅い。彼女の電撃は木山に直撃する。

「うわあぁぁぁぁぁ！？」

電撃をくらい、力なく倒れる木山。そんな中、御坂は自身の能力から木山の過去を垣間見ることとなる。

『きやませんせー！』

倒れる彼女を支えようと思っていた両手から力が抜ける。

「なに……これ……」

流れてきたのは木山の教師をしていた時代の記憶。とても楽しそうに笑いかける子供たちに不慣れながら応えようとする木山。そんな平和でほほえましいワンシーン…。

ふらふらと立ちあがる木山に唖然とした顔で、震える声で御坂は言う。

最後に流れ込んだ記憶は決してほほえましいものではなかった。実験だ。木山の生徒たちを使った…。

「どう…して…」

「見られた……のか…？」

木山は震える声で頭を抑えながら言う。悠斗も駆け寄ってくる。

「これって……」

「君の見たとおりだ…」

「人体……実験……？」

「どう言うことだ御坂…？」

状況がよく分かっていない悠斗に対して御坂は答える。

「私と木山の間に電気を介した回線がつながって偶然木山の記憶をね…」

それを聞いた悠斗は少しうつむき加減で反応した。

「そうか…」

「君なら分かるだろう…あの子達を救いたいと言う気持ちが…！あの子達はこのまま目覚めることも許されない状態で今なお眠り続けている…！」

「そんなことがあったなら警備員（アンチスキル）に連絡して……！」

「無駄なんだよ…」

御坂の言葉を悠斗がさえぎる。その言葉はゾッとするほど低く、悪寒すら感じる冷たいものだった。だが何故彼にそんなことがわか

るのだろうか？

「置き去り《チャイルドエラー》に人権なんてものはない…そう言う実験には大体上がグルだ。警備員（アンチスキル）なんて下っ端は上から圧力をかけられて動けるはずがない」

「そんな……だからってこんな…」

「君に何が分かる！？」

今度御坂の言葉をさえぎったのは木山だ。彼女の声もまた悲痛な叫びとなっていた。

「彼の言う通りなんだ！正攻法は全て却下される！私はどうしても子供たちを助けなきゃならない！この街の全てを敵に回しても……止める訳にはいかないんだぁ！！」

その瞬間木山の身に異変が起き始める。頭を抱えて苦しみだしたのだ。

「ちょ…ちょっと！」

「おい！？」

急なことに二人だ動揺するが、それで木山の状態が回復する訳ではない。

「ネットワークの…暴走…？いやこれは虚数学区の……？」

搾り出すようにそこまで言うと木山の意識はプツンと途絶える。

力なく倒れる。木山の背中から何か得体の知れないものが現れた。

それは胎児のように見えなくもない。だが大きさが違いすぎる。怪獣の赤ちゃんですか？と聞かれてもはいそうですと答えられるレベルだ。

空中でそれは静止すると目がギョロッと開く。赤いそれは多重能力（マルチスキル）を発動していた木山を連想できる。だが木山は片目だったし、何より不気味さと威圧感が木山の比ではない。

「ひっ……！？」

その目を見た御坂から恐怖の声が漏れる。当たり前だ。いくらレベル５と言ってもそれがなければ虫が苦手なただの中学生。こんな不気味で得体の知れないものが怖くないはずがない。

「……」

それを見ながら悠斗はゆっくりと身構える。彼もあの正体不明な物体が怖くないわけではないのだがそうは言っていられない状況だ。

『ギャァァァァァァァァァ！！』

胎児のような何かは奇声と共に辺り一帯に衝撃波のようなものを撒き散らせた。

「「んなっ！？」」

二人は同時に磁力と氷で盾を作り、その攻撃をかわす。そして攻撃をかわした御坂はお返しといわんばかりに電撃を胎児のような化

け物に向けて放った。

バシュゥ！と御坂の攻撃はそれの一部を削り取るが、すぐに何かの能力でその削れた部分を治す。

「いぃ！？」

「やっかいだな…」

だが考え事をしてる暇はない。それは脈を打つかのように少しずつ巨大になっていく。手のようなものもある。そして攻撃したからだろうか…それはこちらを向くと空中に氷の塊を作り出し、それはまっすぐこちらに向かってくる。

「ッ！？避けろ！」

とりあえず二人はそれから離れようとするが氷の塊がひっきりなしに飛んでくる。

「御坂さん！」

不意に御坂を呼ぶ声がする。その方向を向くと人質だったはずの初春が立っている。

「初春さん！？なんで！？」

「チィ！？」

悠斗はとっさに能力を発動する。自分は氷を操らせたら右に出るものはいない。それの操っていた氷はぴたりと止まり、方向転換。

それの方向に向かって飛んでいった。

「ふう…」

とりあえず安全を確保できたと思った彼は一息つく。

「初春さん！大丈夫！？」

「はい！」

御坂は初春の無事を確認するとそれに向き直った。

「よくわかんないけど相手になって……」

だがそれはこちらに追撃はない。ただやみくもに暴れているだけ。それに何かを求めている。何かに苦しんでいるように見える。

「確かによくわかんねぇな…だけど止めるぞ…御坂……！」

「当たり前でしょ！？」

二人はそれに向かって走り出す。

幻想猛獣《ＡＩＭバースト》（後書き）

次回幻想御手編（レベルアッパー）終了！

……するかはわかりません

翔・悠斗「おい！？」

レベル5×2＝最強（前書き）

タイトル…

なんだこれ……

なんだこれ…

レベル5×2＝最強

倒れていた木山が瓦礫の上で目を覚ます。後方で警備員（アンチスキル）と戦うそれに気付く。勿論最初はそれが何かは分からなかった。

「ハハッ……」

それが自分が生み出したものであることに気付いた瞬間笑いがこみ上げてくる。

「すごいな…まさかあんな化け物が生まれるとは…」

そう。決して木山はこの怪物を生み出そうと思って幻想御手（レベルアッパー）を作り出したわけではない。必要だったのだ。樹形図（ツリーダイヤグラム）にも劣らない演算機能が。

だがその演算機能は木山の手を離れ、全てあの化け物が持っている。もはや彼女にそれを制御するすべはない。

「もう終わりだな……」

子供たちを諦めるわけにはいかない。だが方法は失われた。方法がないのにどうやって子供たちを救えるだろうか。

「諦めないでください！」

聞こえたのは自分が人質にしていた少女、初春と御坂。悠斗は先に化け物に向かっている。

「あれはおそらくＡＩＭ拡散力波の集合体だろう……幻想猛獣《ＡＩＭバースト》と言った所か……」

木山はあの化け物の正体をそう推測する。

「だってさ…聞こえてる？」

『聞こえてるよ！うぉっと…』

御坂は開きっぱなしの携帯電話に向かってそう言うと、電話越しに悠斗の声がする。

「幻想御手（レベルアッパー）のネットワークによって束ねられた一万人のＡＩＭ拡散力波…それらが触媒となって生まれた潜在意識の怪物……言い換えればあれは一万人の子供たちに思念の塊だ……」

それを聞くと先程感じた幻想猛獣《ＡＩＭバースト》が苦しんでいるように見えたのもうなずける。あれは苦しんでいるのだ。

悠斗の氷を使った攻撃は、御坂の電撃と同じように当たってもすぐに修復される。もうレベルを隠している場合じゃない。彼はレベル５としての力をフルに使って幻想猛獣《ＡＩＭバースト》と戦っていた。

だが幻想猛獣《ＡＩＭバースト》にとって悠斗など眼中にない。…と言うよりは眼中に何が映っていて、何を目的に暴れていて、何が標的なのかも分からない状態だ。

「どうやったらあれを止められるの？」

御坂はうつむく木山をまっすぐに見据えながら問う。正直、彼女より悠斗の方が実力は上だ。そしてその悠斗の攻撃がまるで効いていない。せめてあの再生能力ぐらいは削り取らなければ勝ち目はないだろう。

「……幻想猛獣《ＡＩＭバースト》はネットワークが生み出したものだ。それを破壊すればあるいは…と言うかそう言って君たちは私の言うことを信じるのかい？」

『当たり前だろ…あんたの子供たちを助けたいって気持ちは本当だ…それを妨げるあれを倒す方法を教えないはずがない』

答えたのは悠斗だ。

『だから少なくとも俺はお前を信じる…おっと！？黄泉川！邪魔だっつーの！下がってろ！』

『そうはいかないじゃん！』

なにやら向こうでもめ始めた様子なので御坂は携帯を切る。これで悠斗の声は聞こえなくなる。

「幻想御手（レベルアッパー）の治療プログラムだ…それならばネットワークを破壊できるだろう」

初春は自分の持つ小さなＳＤカードを握り締める。この中に治療プログラムが組み込まれているのだろう。

「私はあいつと一緒にあれを食い止めてくるから初春さんはプログ

ラムを警備員（アンチスキル）に…！」

「分かりました！」

御坂と初春は互いにうなずくと、別々の方向へと走り出す。

「いい加減止まれクソッたれえぇぇぇぇ！！」

悠斗が生み出す氷結水龍（フリーズドラゴン）は幻想猛獣《ＡＩＭバースト》へと突っ込んで行く。だがいくらダメージを与えても怪物は止まらない。だが絶対に止めなければならいらい。自分の後ろにある施設へ近づけるわけには行かない。

突如砂鉄で出来た刃が幻想猛獣《ＡＩＭバースト》の触手を叩き斬る。この攻撃ではそれにダメージは与えられない。だがこちらに存在を気付かせることは出来る。

「御坂！」

「あんた一人じゃ不甲斐ないから手伝いに来たわ！」

「お前能力使うなら気をつけろ！あの建物は原子力実験炉だ！黄泉川たちから聞いてないのか！？」

「えっ！？じゃあ警備員（アンチスキル）が撤退しなかったわけって…」

「そんな状況で撤退なんぞ出来るか……って話だよ…」

悠斗から発せられる衝撃の事実。あんな怪物がそんな場所で暴れたら…考えるのも恐ろしいが甚大な被害が出るのは間違いないだろ

う。

二人は幻想猛獣《ＡＩＭバースト》にありったけの攻撃を加える。砂鉄での攻撃電撃での攻撃、氷の刃での攻撃。他にも様々方法で攻撃を加えるのだが、それはダメージを与えるどころか、それの強大化すら止められない。

引っ掛かりがあった。どんな姿をしていようとあれは一万人もの子供たちの思念の塊。つまり元は人間なのだ。それが二人の攻撃を少しだけ緩めてしまっていた。

それはつまり幻想猛獣《ＡＩＭバースト》の進行を止めきれないことを意味している。

「やばっ！？」

御坂が避けた攻撃は施設の外壁部分を破壊する。悠斗が応急処置で氷の壁を作るがいつまでもつかは分からない。

「これ以上はやべぇぞ…」

悠斗が言うがそんなことは御坂も分かっている。だがこのままでは本当に危ない。

キィィィィン……

原子力実験炉のスピーカーから何か聞こえてくる。甲高い音…そうではない。文章で表現するのは難しいのだがとりあえず何かの音が辺り一帯に流れている。

「何…この曲……？」

「この音…治療プログラムか！？」

自分の憶測が事実かどうか、それを試すために悠斗は氷結水龍（フリーズドラゴン）を幻想猛獣《ＡＩＭバースト》へ向かって放った。氷の龍はそれの半身を一瞬で凍りつかせ、その部分は見事に砕け散る。…再生は……していない。

「初春さんやったんだ！」

御坂は歓喜の声をあげる。これで自分たちの攻撃が通る。そう思った御坂は電撃を追撃として放ち、遂に幻想猛獣《ＡＩＭバースト》は叫び声ともとれる音を立てながら地面に崩れ落ちた。

もはや再生能力がない幻想猛獣《ＡＩＭバースト》など二人の相手ではない。そう思わせるには十分なほど圧倒的だった。

「まだ終わりじゃない！」

突然声がする。女性の声だ。

「きっ…木山！？」

声がした方向を見ると確かにそこには木山春生がいる。

「それには恐らく核の様なものがある！それを破壊しない限り倒せない！」

「核……？」

驚く悠斗を他所に幻想猛獣《ＡＩＭバースト》はのそりと起き上がる。再生とまではいかないが傷口は塞がり始めている。

「嘘でしょ！？まだ動けるなんて…」

次の瞬間脳に直接聞こえてくる声。幻想御手（レベルアッパー）使用者の声だ

「なんだこれ……」

二人は困惑する。たが一万人もの悲痛な叫びは止まらない。

『どうしても力がいる』

『能力で全て決められるなら能力を手に入れるしかないじゃないか』

『家族からの期待は裏切れない』

『あなたたち高位能力者には分からないだろうけど…』

「確かに…能力を生まれ持った俺には能力を持たない人の気持ちなんて分からない…皮肉じゃなくな…」

「そうね…でもさ……こんなところで下向いて立ち止まってないでさ…前を向いて歩き出してみようよ…」

二人は幻想猛獣《ＡＩＭバースト》に優しく語りかける。

「幻想御手（レベルアッパー）に手を出す程の勇気…今度は他の誰かのために出してみようぜ……？」

ピキッ…！再び凍りついたのは幻想猛獣《ＡＩＭバースト》の頭部。そして砕け散る表面。その中にあるのは……核だ。

「御坂……」

「分かってるわよ…」

やることは分かっていた。既に一枚取り出していたコインは宙を舞う。自由落下に任せて落ちてきたコインを親指で思い切り弾く。

「もう一度！！」

弾かれたコインは電気を帯ながら音速を遥かに越える速度で幻想猛獣《ＡＩＭバースト》の核を捉える。

核を破壊された幻想猛獣《ＡＩＭバースト》は今度こそ音もたてずに虚空へと消えていく。最後の最後にそれは儚く見える。人の夢と書いてはかないと読むとはよくいったものだ。

そう思える程、その幻想は儚く消えていった。

レベル5×2＝最強（後書き）

ウェーイ！

翔「ブレイド！？」

悠斗「ほっとけ…それよりも幻想御手編が終わったら禁書目録編に戻るから出番増えるぞ？」

翔「自動書記との戦いにどうやって割り込めと……」

悠斗「それはあれだ…作者が考えてるはず…」

翔「そうなのか作者！」

……ごめんなさい……

翔「なん……だと……？」

解決、その後（前書き）

幻想御手編（レベルアッパー）完結！

ぶっちゃけ幻想御手編（レベルアッパー）はプロローグにも近かったのでそっこう終わりましたね（笑）

禁書目録編も似たようなもんですし、あとは自動書記との戦いだけなのでこれまた早く終わると思います

感想待ってます！

ではっ！

解決、その後

ガチャリ……木山の両手に手錠がかけられる。抵抗はない。多重能力（スキル）がなくなった今、彼女が警備員（アンチスキル）に抵抗する術はない。

「しっかし…脳のネットワークを作り出すなんて……そんな方法よく思い付いたわね」

ふと木山に話しかける御坂。確かに中々考え付く方法ではないだろう。

「…君から……と言うよりは君の能力からヒントを得たからな」

「？」

意味が分からない。彼女にそんな能力はないし、それなのに彼女からヒントを得たとはどういうことなのだろうか。

「御坂……脳のネットワーク……」

何やら悠斗はその単語に引っ掛かりを感じる。そのためか手を顎の辺りにあて、呟いていた。

「今後も手段を選ぶつもりはない。気に入らなかったら邪魔しに来たまえ…あとあの電撃の痛みは一生忘れない」

「あんたねぇ……」

木山の言葉に御坂はまだ懲りてないのかよ…とため息をつく。

「御坂……ミサカ…ネットワーク！」

悠斗は何かに気付き、途切れ途切れにある単語を呟くと同時に驚きを隠せないでいた。

「何よ…そのなんたらネットワークって」

途中から悠斗の独り言を聞いていたのか御坂が反応するが、肝心なところは聞き逃した様子だが。

「さぁな…そんなことより木山さん…知ってるんですか？超能力者量産計画（ノイズ）……」

「超能力者量産計画（レディオノイズ）……知っているよ…関わっていたわけではないがね」

「レディオ…ノイズ……？」

悠斗と木山の話を聞いていた御坂は彼らの話の内容がまるで理解できなかった。二人は自分の知らない世界の話をしている。

「……結局君も私と同じ…絶望的な運命を背負っていると言うことだ」

「……？」

木山は御坂に言うが、彼女としてはますます分からなくなるばかり。だが木山は警備員（アンチスキル）に連れられ護送車の中へと入っていった。

「……あんたも知ってるのよね……」

木山から聞き出すのは無理だと判断した御坂はその矛先を悠斗に向ける。

「…何をだ？」

「……とぼけるのね…？レディオノイズ計画って言うのが何かは分からない…だけど木山は私と関係があるような口振りだった……」

「…超能力者量産計画（レディオノイズ）……知って得することと損することがある…ここまで言えば分かるよな？」

悠斗は少し口調を強くして言う。仮に御坂が無理やり能力を使って聞き出そうとしても自分は負けないと思っていた。御坂との戦闘の後、自分の位置を第3位以上第2位未満だと思っている。簡単に言えば2．5位だ。悠斗は自分では第2位に届かないことを知っていた。所詮この世の物理法則に従って氷を操る能力ではこの世の物理法則をねじ曲げることのできる未元物質（ダークマター）とは勝負にならないのだ。

だが今目の前にいるのは第2位ではなく第3位だ。十分に勝てる相手である。

「そう…じゃあ言いたくなるまで遊んでもらうわよ！」

そして案の定御坂は悠斗に向かって電撃を放つ。彼はそれを氷の壁で防いだ。氷の壁に多少の亀裂が入るが、一瞬で修復する。

「ったく…めんどくせぇな……」

今度は磁力で操られる砂鉄の刃が彼に向かって飛んでくる。

彼はそれに対して砂鉄が浮いている自分と御坂の間にある空間ごと凍らせる。実に巨大な氷がそこに突然姿を表したのだ。

「なっ……」

磁力の操作を失った砂鉄は砕ける氷と共に崩れ落ちる。わざわざこんな防ぎ方をしたのは実力の差を必要以上に感じさせるためだ。理由はこの原子力実験炉なんてものが近くにある状態でレベル５同士が本気を出して戦う訳にはいかない。だからこの事態を早く沈静化させる必要があったのだ。

「続きをやるにしてもここで今すぐにはまずい…とりあえず一旦帰んぞ」

「……」

どうも正論過ぎて言い返せないのか御坂は黙り込んでしまう。

「あ…そうだ……幻想猛獣《ＡＩＭバースト》倒して幻想御手（レベルアッパー）事件解決したのはお前ってことになるから。もう黄泉川には言ってある」

「はぁ？」

いや何でだよ…と聞き返す前に悠斗は続ける。

「あ～…ほらアレだ…俺って書庫（バンク）だとレベル２ってことになってんだろ？あん時だったらそれこそ幻想御手（レベルアッパー）使ってましたで最悪どうに

かなるけど今回はそうはいかないだろ？」

まだ彼は自分がレベル５であることは話していないが、ここまで能力を使いまくっていたので恐らくバレていることだろう。

「まぁそんなわけだから」

そうこうしているうちに黄泉川と言っていた警備員（アンチスキル）の車に乗り込んで行ってしまう。

「……」

御坂の中に沸々と殺意が沸き出てくる。以前にも似た様なことがあった。あのときはツンツン頭の少年が自分の代わりに友達を助けてくれた。そして今回は自分が取り逃がした木山と戦い、その場に止めておいてくれた悠斗。どちらも全て手柄を自分に明け渡すと言うのだ。

「だぁぁぁぁ！！」

やり場の無い怒りをとりあえず声として外に出してみる。……効果は薄い。

「何で私の周りの男はこんな意味不明なのよおぉぉぉぉ！！」

ある意味心からの叫びだった。悠斗に関してはレベル２、先程話にてできたツンツン頭の少年はレベル０だ。レベル５第３位の自分が負ける要素は何処にもないはずだった。悠斗に関しては明らかにレベル５級の能力を使っているが、ツンツン頭の少年に関しては自分の攻撃が全て打ち消されてしまうのだ。

「…お姉さまあぁぁぁ！」

頭を抱えている御坂の元へ、白井黒子が思いっきり突っ込んでくる。

「黒子！？」

ギリギリのところで気付いた御坂はいきなり空間移動（テレポート）で現れた白井をかわす。

「ボフゥ！？」

着地するクッションが無くなってしまったので顔面から地面に吸い込まれていく。

「……」

そんな白井に対してたいして心配する様子もなく冷たい目で白井を見る。

「ひ…ひどいですの……」

額を手で押さえながら白井は起き上がる。

帰ってきたのは日常。幻想御手（レベルアッパー）などない平和な日常。だが終わりじゃない…木山と悠斗は自分に何かとてつもないことを隠している。御坂はそう思えて仕方がなかった。だがせめて今はこの取り戻した平和を感じようじゃないか。

「……」

「お姉さま？どうなさったんですの？」

「ううん…なんでもない」

御坂の表情に気付いたのか、白井は御坂に質問する。が、彼女は否定する。そして今度会ったときはしっかり聞き出してやると心に決める御坂であった。

自動書記《ヨハネのペン》

時は元に戻る。悠斗と御坂が幻想御手事件を解決してから数日後、夜。月詠小萌の部屋の布団でインデックスは横になっていた。

彼女は完全記憶能力により、一年おきに記憶を消していかないと生きていけない体だったらしい。だがそれは嘘の情報だった。彼女の特異体質は死につながるようなものではなかった。それでも彼女は布団の上で意識を失っている。

「……」

それを何も出来ずにいる自分がどうしようもなく情けない。当麻と翔は、そう言う感情に押し潰されそうになっていた。

彼らはこの世界ではイレギュラー中のイレギュラーだった。異能の力なら、魔術、超能力問わず打ち消すことの出来る右手、幻想殺し《イマジンブレイカー》を持つ少年。そして異世界の力、マスクドライダーシステム、カブトの資格者である少年だ。そんな力を持っているからこそ、何も出来ないのがどうしようもなく悔しい。

だが神裂たち、魔術師の調べによると『首輪』と言う魔術をインデックスにかけている。と言うことは分かった。だがその魔術がどこにあるこか、つまりどこを幻想殺し《イマジンブレイカー》で触れればいいのかが分からないのだ。それにその魔術を無闇に破壊してインデックスの身に何かが起きないとも限らない。

「やっぱり俺はこのままじっとしている事なんて出来ない。」

当麻はそう言うと自らの右手を凝視する。しかし何が起きるか分からないからと言われていたがついに当麻はインデックスの額を触る。

「…ッ！？」

翔も驚きながらそれを見る。能を圧迫する魔術なら、その辺りに異能の力の源があっても不思議ではない。だが結果として何かが起きることはなかった。異能の力に触れていないのだ。他にも頬などを触ってみても結果は同じ。もしかしたら力の源はインデックスにないのかもしれない。しかし、力の源がここなかったとしても少なくともインデックスの呪縛は解くことが出来るだろう。

「……」

この二日間、インデックスとふれあい、過ごした。じゃれあうこともたくさんあった。…なら、もし額なんぞに異能の力があったならば、ひょんなことからそれに右手で触れてしまい破壊。なんて笑えない話になりかねない。つまりだ異能の力は普段決して触れないような場所にある可能性が高い。

普段触れないのは服の中……別の方向に思考が飛びそうになった当麻だったが強引に立てなおす。おそらく違うだろう…というか違くてあってくれと切に願う彼だった。

「これって…」

当麻がそんな馬鹿げた思考をしているうちに翔がカブトゼクターを使って魔術の発生源を探す。そしてカブトゼクターが反応したの

はインデックスの口の辺り…つまり

「えっと……マジ……？」

普段触れない場所…それだけで触るのにいろんな意味で抵抗がある場所だろうと言うことは予想がついていた。だがこれは流石にビックリだ。だが喉とは直線距離ならつむじよりも脳に近い。

そして迷っている時間はない。記憶破壊決行まで後数分…当麻は覚悟を決めるとゆっくりと、なるべく刺激しないように

パチン、と静電気が散るような感触を当麻は右手の人差し指に感じると同時、

バギン！と。当麻が右手ごと勢い良く後ろへ吹き飛ばされた。

「がっ……！？」

ぱたぱた、と布団や畳の上に血の珠がいくつも落ちる。

まるで拳銃で手首を撃たれたような衝撃に当麻は思わず自分の右手を見た。元々神裂に引き裂かれた傷が開いてボタボタと音を立てて鮮血が畳の上へ落ちていく。

「当麻……ッ！？」

翔も直ぐ様当麻の元へ向かい、彼の体を支える。

そして次の瞬間、ぐったりと倒れていたはずのインデックスの両目が静かに開き、その眼は赤く光っていた。

それは眼球の色ではない。眼球の中に浮かぶ、血のように真っ赤な魔方陣の輝きだ。

「なっ…！？」

（まずい……ッ！！）

呆気に取られている翔に対し、当麻は本能的に右手を突き付ける。

だがその前に、何かが爆発した。

ゴッ！という凄まじい衝撃と共に二人の体は向かいの本棚へ激突する。本棚は、崩れ、バラバラと大量の本が落ちる音が響く。

二人は全身の関節がバラバラと砕けてしまいそうな激痛に教われる。

翔は痛みをこらえ、どうにか立ち上がった。彼は幸い戦闘慣れしている。だが当麻は違う。小刻みに震える両足でかろうじて立ち上がる。

「――警告、第三章第二節。Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ――禁書目録（インデックス）の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、十万三千冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

二人は目の前を見る。のろのろと。インデックスはまるで骨も関節もないような、不気味な動きでゆっくりと立ち上がる。その眼に宿る真紅の魔方陣が二人…というよりは『首輪』を破壊した当麻を

射抜く。

「なんだよ…これ…ホントに…インデックスか…？」

魔術どころか超能力にも疎い翔にとって、これは信じがたい光景だった。

「……そういやぁ、ひとつだけ聞いてなかったっけか…」

当麻はボロボロの右手を握りしめながら呟く彼女はかつて言った。自分には魔力が無いから魔術は使えないと…

「超能力者でもないテメェが、どうして魔力がないのかって理由」

その理由がおそらく…というよりほぼ間違いなくこれだ。教会は二重三重の防御網を用意していた。もし誰かが『完全記憶能力』の秘密について知り、『首輪』を破壊、もしくは外そうとした場合。インデックスは自動的に十万三千冊の魔道書を操り、秘密を知った者の口を封じる。

「――『書庫』内の十万三千冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術を組み上げらす」

翔はまだ何も行動を起こしていない。そのためか、インデックスが標的にしているのは当麻だけのようだ。そしてインデックスは糸で操られる人形のように小さく首を曲げて、

「――侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊

します」

バギン！と凄まじい音を立てて、インデックスの両目にあった2つの魔方陣か一気に拡大した。インデックスの顔の前には直径2メートル強の魔方陣か2つ、重なるように配置してある。そるは左右1つずすの眼球で固定されているようだ。

「あ、」

当麻は唐突に知った。

『首輪』は幻想殺し《イマジンブレイカー》によって破壊できている。ならあとは…

ようは『それ』さえ倒してしまえば。他の誰でもない、今となりにいる翔でもない、自分自身の手でインデックスを助け出すことができる。

「あはははははははははは！！」

だから当麻は歓喜に震えていた。隣でびっくりしている翔など気にしない。

恐い？そんなはずはない。神様の奇跡すら打ち消せる自分の右手。そんな凄いものであるはずなのに自分の不幸の象徴であるこの右手。

もう一度、あのインデックスを機械のように動かしているあの魔術。それさえ打ち消せれば…たった4メートル。もう一度あの少女に触れるだけで全てを終わらせることができるのだから、

刹那、巨大な亀裂がインデックスの前に現れる。同時、

ゴッ！！と。亀裂の奥から光の柱が襲いかかってきた。

自動書記《ヨハネのペン》（後書き）

翔「……」

う…ん

翔「結局俺はこの戦いは空気なのか…？」

ぶっちゃけマスクドフォームでもインデックスの攻撃に耐えられないだろうし……

翔「チキショオォォォォォォォ！！」

…どっか行っちゃった…

まあいいか！感想待ってます！！

一度目の死

当麻に向かって飛んでいく光の柱。もう例えるなら直径一メートルほどのレーザー兵器に近い。太陽を溶かしたような純白の光が襲いかかってきた瞬間、当麻は迷わずボロボロの右手を顔の前につき出した。

じゅう、と熱した鉄板に肉を押し付けるような衝突音。

翔は咄嗟に横へ回避行動をとったらしく、少し離れた場所でベルトにカブトゼクターをスライドさせる。

当麻の右手に痛みはない。熱もない。まるで消化ホースでぶち撒かれる水の柱を透明な壁で弾いているかのように、光の柱は当麻の右手に激突した瞬間、四方八方へと飛び散っていく。

それでも、『光の柱』そのものを完全に消し去ることはできない。

まるでステイルの魔女狩りの王（イノケンティウス）のように、消しても消してもキリがない感じ、畳につけた両足がじりじり後ろへ下がり、ともすれば重圧に右手が弾き飛ばされそうになる。

一方で、マスクドフォームに変身したカブトはそこから後の行動ができない。いくら強力な魔術を使っているからといっても彼女は生身の少女だ。そんなきしゃな体に強化された拳を向けることなどできはしない。

だがインデックスは待ってくれない。

当麻は思わず空いた左手で吹き飛ばされそうな右手の手首を掴む。右手の掌の皮膚がビリビリと痛みを発した。魔術が食い込んできている……右手の処理能力が追いつかず、ジリジリてミリ単位で光の柱が当麻の方へと近づいてきているのだ。

（単純な『物量』だけじゃねぇ……ッ！光の一粒一粒の『質』がバラバラじゃねぇか！！）

ひょっとすると、インデックスは十万三千冊の魔道書を使って、十万三千種類もの魔術を同時に使っているのかもしれない。一冊一冊が『必殺』の意味を持つ、その全てを使って。

と、アパートのドアの向こうが騒がしくなってきた。異変に気づいた神裂たちがドアを開けて入ってきた。

「何が起きているんだ！？」

叫びながらステイルは中に入る。だがその瞬間背中を殴られたように息をつまらせた。目の前にある光の柱――そしてそれを放つインデックスを眺めて心臓が止まったような顔をしている。

神裂が……あれだけ孤独で最強に見えた神裂が、目の前の光景に絶句していた。

「…ど、竜王の殺息（ドラゴンブレス）って、そんな……そもそもあの子が魔術を…教会はまだ私たちを…」

当麻は振り返らない。

振り返るだけの余裕がないのも事実だったし、もう現実から目を

逸らすのは嫌だった。

「おい、コイツがなんだか知ってんのか！？」

だから、振り返らないまま叫ぶ。

「コイツの名前は？正体は！？弱点は！？俺はどうすればいい、一つ残らず全部まとめて片っ端から説明しやがれ！！」

神裂は口を開けようとする。だがその前にインデックスが口を開いた。

「――『聖ジョージの聖域』は侵入者に対して効果が見られません。他の術式へ切り替え、引き続き、『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

それは間違いなく二人の魔術師の知らないインデックスだっただろう。

それは間違いなく教会に教えられなかったインデックスだっただろう。

「……」

ステイルはほんの一瞬、本当に一瞬だけ、奥歯が砕けるほど歯を食いしばって、

「Ｆｏｒｔｉｓ９３１」

その漆黒の服の内側から、何万枚というカードが飛び出した。

炎のルーンを刻んだカードは台風のように渦を巻き、あっという間に壁や天井や床を隙間なく埋めていく。それこそ、まるで耳なし芳一のように。

だが、それは当麻を救うためではない。

インデックスという一人の少女を助けるために、ステイルは当麻の背中に手を突きつけた。

「曖昧な可能性なんていらない。あの子の記憶を消せば、とりあえず命を助けることができる。僕はそのためなら誰でも殺す。いくらでも壊す！そう決めたんだ…ずっと前に」

ステイルも苦渋の決断だったに違いない。彼らは『首輪』の存在を彼らから得た。恩はあるだろう。だがこのまま長引けば、『首輪』の魔術によって彼女は死んでしまう。それを避けたるためなら彼は言った。誰でも殺す。と……。

カブトよりも先に、当麻の口が開いた。

「とりあえず、だぁ？」

カブトは仮面の下で、ふっと笑う。当麻は振り返らない。

「ふざけやがって…そんなつまんねえ事はどうだっていい！理屈も理論もいらねえ…たった一つだけ答えろ魔術師！！」

当麻は息を吸って、

「――――テメェはインデックスを助けたくないのかよ？」

魔術師の吐息が停止した。

「テメェら、ずっと待ってたんだろ？インデックスの記憶を奪わなくても済む、インデックスの敵に回らなくても済む、そんな誰もが笑って誰もが望む最っ高な幸福な結末（ハッピーエンド）ってやつを！」

無理矢理に光の柱を押さえ続ける右手の手首が、グギリと嫌な音を発した。それでも当麻は諦められない。

「ずっと待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を！英雄がやって来るまでの場繋ぎじゃねえ！主人公が登場するまでの時間稼ぎじゃねえ！他の何者でもなく！テメェのその手で、たった一人の女の子を助けてみせるって誓ったんじゃねえのかよ！？」

バギン、と右手の人差し指の爪に亀裂が走り、真っ赤な鮮血が溢れてきた。

今にでも止めに入りたい。カブトの頭の中はそんな衝動にかられていた。だが下手な攻撃はインデックスを傷つけることに繋がる。それだけは避けなければならない。

それでも当麻は、諦めたくない。

「ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！絵本みてえに映画みてえに、命を賭けてたった一人の女の子を守る、そんな魔術師になりたかったんだろ！だったらそれは全然終わってねえ！！始まってすらいねえ！！ちょっとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃねえよ！！」

魔術師の声が、消えた。

当麻は絶対に諦めない。その姿に、魔術師達は一体何を見たのか。

「――手を伸ばせば届くんだ。いい加減に始めようぜ、魔術師！」

グキリ、と当麻の右手の小指が妙な音を立てた。

不自然な方向に曲がって――折れた――と気づいた瞬間、恐ろしい勢いで襲いかかる光の柱は、ついに当麻の右手を弾き飛ばした。

「――危ない！」

カブトは咄嗟に当麻と光の柱の間に入る。こんなもの、生身の人間がくらえば木っ端微塵だ。せめてマスクドフォームの分厚い装甲ならきっと……

「――――Ｓａｌｖａｒｅ０００！！」

光の柱がぶつかる直前、二人は神裂の叫び声を聞いた。

それは日本語ではない。聞きなれない言葉。けれど似たような言葉を――いや、名前を当麻は一度だけ聞いたことがある。先程ステイルが名乗っていた『魔法名』。神裂が名乗りたくないと言っていた『魔法名』だ。

神裂のもつ、二メートル近い長さの日本刀が大気を切り裂いた。七本のワイヤーを用いる『七閃』が音を引き裂くような速度でインデックスの元へと襲いかかる。

だが、それはインデックスの体を狙ったものではない。

インデックスの足元。脆い畳を七本のワイヤーが一気に切り裂いた。突然足場を失ったは彼女はそのまま後ろへ倒れ込む。インデックスの眼球と連動していた魔方陣が動き、二人を狙っていたはずの光の柱が大きく狙いを外す。

まるで巨大な剣を振り回すように、アパートの壁から天井までが一気に引き裂かれた。夜空に漂う雲までもが引き裂かれる。……いや、ひょっとすると大気圏の外にある人工衛星まで引き裂いたかもしれない。

引き裂かれた壁や天井は、木片すら残さない。

代わりに、破壊された部分が光の柱と同じく純白の光の羽となった。それは無数にひらひらと。夏の夜に冬の雪のように舞い散る。

「それは竜王の吐息（ドラゴン・ブレス）――伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です！いかなる力があるとはいえ、人の身でまともに取り合おうと考えないでください！」

神裂の言葉を危機ながら当麻は床に倒れ込んだインデックスの元へと一気に走ろうとする。

だが、それより先にインデックスが首を巡らせた。

夜空を引き裂いていた『光の柱』が再び降り下ろされる。

「魔女狩りの王（イノケンティウス）！」

身構える二人の前で巨大な炎が渦を巻いた。

人のカタチを取る巨大な火炎は、両手を広げて真正面から『光の柱』の盾となる。

「行け、能力者！元々あの子のリミットは過ぎているんだ！何かを成し遂げたいなら、一秒でも時間を稼ごうとするな！」

「行ってこい！」

ステイルとカブトの声がする。当麻は背後を振り返らない。そんなことをする前に、ぶつかり合う炎と光を迂回するようにインデックスの元へと走り寄った。

当麻は走る。止まることなどあり得ない。

「――警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を変更、戦場の検索を開始……完了。現状、最も難度の高い敵兵『上条当麻』の破壊を最優先します」

ブン！！と『光の柱』ごとインデックスは首を振り回す。だが、同時に魔女狩りの王（イノケンティウス）め当麻の盾になるように動いた。破壊と再生を繰り返しながら延々とぶつかり合う。

「ダメです！上！！」

全てを引き裂くような神裂の叫び声。もう手を伸ばせばインデックスの顔の前にある魔方陣に触れられる。そう思った矢先だった。

光の羽。

魔術を知らない当麻でも何となく分かる。それが、たった一枚でも触れてしまえば大変なことになる事ぐらい。

そして、何十枚もの羽は、やはり彼の右手を使えば簡単に打ち消す事ができる事も。だが

「――警告、第二十二章第一節。炎の魔術の術式の逆算に成功しました。曲解した十字教のモチーフをルーンにより記述したものと判明。対十字教用の術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。命名『神よ、何故私を見捨てたのですか《エリ・エリ・レマ・サバクタニ》』完全発動まで十二秒」

『光の柱』の色が純白から血のように赤い真紅へと変化していく。魔女狩りの王（イノケンティウス）の再生スピードがどんどん弱まり、『光の柱』に押されていく。

光の羽を相手していては魔女狩りの王（イノケンティウス）はもたない。カブトの装甲に再生機能などない。

光の羽など関係なかった。今目の前にいる少女を救う。

（この物語（せかい）が…神様（アンタ）の作った奇跡（システム）の通りに動いてるってんなら……）

当麻は握っていた拳を思い切り開く。

（まずは…その幻想をぶち殺す！！）

そして当麻は右手を降り下ろした。そこにあるのは黒い亀裂、さ

らにその先にある亀裂を生み出す魔方陣。

当麻の右手がそれをいとも簡単に引き裂いた。

「――警…こく。最終……章。第…零……『首輪』…致命的な…破壊……再生…不可……消」

インデックスの口からすべての声が消えた。他にも魔方陣や、光の柱もきれいさっぱりなくなった。

その時、上条当麻の頭の上に、一枚の光の羽が舞い降りた。

当麻はその瞬間、誰かの声を聞いた。それがステイルなのか、神裂なのかカブトなのか…あるいは目を覚ました（かもしれない）インデックスの声だったのか、それすらも彼には分からなかった。

当麻の意識が消えた。一瞬で。

彼は未だ床の上に倒れているインデックスに覆い被さるように倒れ込んだ。

まるで降り注ぐ光の羽から彼女を庇うように。

この夜。

上条当麻は『死んだ』

一度目の死（後書き）

上条さんまじ説教長げぇす…

翔「でばーん！！」

普段より長くなりましたがまぁ元々が短いのでちょうどよかったですかね？

翔「でばーん！！」

そんなわけで感想待ってます！

翔「でばーん！！」

透明な少年（前書き）

ほとんど原作と同じになってしまった……ｏｒｚ

透明な少年

とある病院。ここで純白の修道服を着た少女、インデックスはとある病室に向かって歩いていた。自分のせいで傷ついてしまった少年のもとへ…。

こんこん、と病室のドアを二回ノックした。

たったそれだけの仕草に、インデックスは心臓が破裂しそうになる。返事が返るまでの間にそわそわと掌についた汗を修道服のスカートでごしごし拭いて、ついでに十字を切った。

はい？と少年の声が返ってきた。

インデックスはギクシャクとロボットみたいにドアを開ける。六人一部屋の病室ではなく、一人一部屋の個室だった。壁も床も天井も白一色のせいか、距離感がズラされて妙に広く感じる。

ベッドの側の窓は開いていて、ひらひらと真っ白なカーテンが揺らいでいた。

生きていた。

たったそれだけの事実に、インデックスは涙がこぼれるかと思った。

あの……、と頭にハチマキみたいに包帯を巻いた少年は、小さく首を傾げて、言った。

「あなた、病室を間違えていませんか？」

少年の言葉はあまりに丁寧で、不審そうで、様子を探るような声だった。

――あれは記憶喪失というより、記憶破壊だね？

凍てつく夏の診察室で医者が放った言葉がインデックスの脳裏をよぎる。

――思い出を『忘れた』のではなく物理的に脳細胞ごと『破壊』されているね？あれじゃ思い出す事はまずないと思うよ？まったく頭蓋骨を開けてスタンガンでも突っ込んだのかい？

「……、っ」

インデックスは、小さく息を止める。視線が、どうしても下を向く。

ある少年は、身体ではなく精神が死んだという、たったそれだけのお話。

あのう？という、不安そうな、否、心配そうな少年の声。

インデックスは何故か、透明な少年がそんな声を出すのが許せなかった。

少年は自分のために傷ついた。なのに、少年が自分の事を心配するなんて、そんなのずるい。

インデックスは胸に込み上げてくる何かを飲み込むように息を吸う。笑う事は、できたと思う。

少年はどこまでも透明で、インデックスの事なんて少しも覚えていなかった。

「あの、大丈夫ですか？なんか君、ものすごく辛そうだ。」

なのに、透明な少年は一発で完璧な笑顔を打ち砕く。そういえば、この少年はいつも笑顔の裏にある隠れた本音を除き込もうとするのだった。

「ううん、大丈夫だよ」インデックスは息を吐きながら、「大丈夫に、決まってるよ」

透明な少年はしばらくインデックスの顔を眺めていたが、

「……あの、ひょっとして。俺達って、知り合いなのか？」

その質問こそが、インデックスには一番辛い。

うん……、と。インデックスは、ポツンと病室の真ん中に立ったまま、答えた。まるでマンガに出てくる小学生が宿題を忘れて廊下に立たされてるような、そんな仕草だった。

「とうま、覚えてない？私達、学生寮のベランダで出会ったんだよ？」

「――俺、学生寮なんかに住んでたの？」

「……とうま、覚えてない？とうまの右手で私の『歩く教会』が壊

れちゃったんだよ？」

「――あるくきょうかいって、なに？『歩く教会』……散歩クラブ？」

「……とうま、覚えてない？とうまは私のために魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「とうまって、誰の名前？」

インデックスの口は、あと少しで止まってしまいそうだった。

「とうま、覚えてない？」

それでも、これだけは聞いておきたかった。

「インデックスは、とうまの事が大好きだったんだよ？」

ごめん、と透明な少年は言った。

「インデックスって、何？人の名前じゃないだろうから、俺、犬か猫でも飼ってるの？」

うぇ……、と。インデックスは『泣き』の衝動が胸の辺りまでせり上がってくる。けれど、インデックスは全てを噛み殺し、飲み込んだ。

飲み込んだまま、笑う。完璧な笑みとは程遠い、ボロボロの笑顔にしかならなかったけど、

「なんつってな、引ーっかかったぁ！あっはっはーのはーっ！！」

はえ……？とインデックスの動きが止まった。

透明な少年の不安そうな顔が消えている。まるでぐるんと入れ替わったよに犬歯剥き出しの、獰猛で超邪悪な笑みが広がっている。

「犬猫言われてナニ感極まってんだマゾ。お前はあれですか、首輪趣味ですか。ヲイヲイ俺ぁこの歳で幼女監禁逮捕女の子に興味があったんですエンドを迎えるつもりはサラサラねーぞ」

透明な少年にはいつの間にか色がついていた。

インデックスには訳が分からない。両目をごしごし擦ってみても、目の前の透明な少年は、いつの間にか『上条当麻』へと変わっていた。

「あれ？え？とうま？あれ？脳細胞が吹っ飛んで全部忘れたって言ってたのに……」

「……なんか忘れてた方が良かったみてーな言い方だなオイ。お前も鈍チンだね。医者の話だと脳細胞が傷ついてんだってな。だったら記憶喪失になっちまうはずだったってか？」

「はず、だった？」

「おうよ。だってさ、その『ダメージ』ってのも魔術の力なんだろ？」

そこまで聞いてインデックスは気づく。少年の右手には何が宿っ

ていたのか。

「そういう事さ。そういう事です、そういう事なの三段活用。だったら話は簡単だ、自分の頭に右手を当てて、自分に向かって幻想殺し《イマジンブレイカー》をブチ当てちまえば問題ねえ」

ああ、とインデックスはへなへなと床の上に力なく座り込んでしまった。

ムチャクチャすぎる。

ムチャクチャすぎるけど、そういえばこの少年の右手は神様の奇跡だって打ち消せるんだった。

呆然と、ただ呆然と。床の上でぺたりと女の子座りしたインデックスは上条の顔を見上げた。

断言できる、絶対修道服の肩はずり落ちてる。それぐらい間抜けな顔になっている。

「ぷっぷくぷー。普段さんざん自己犠牲で人を振り回してたお前の事だ、今回の事でちったぁ自分見直す事できたんじゃねーの？」

……、インデックスは何も答えない。

「――――って、あれ？……あのー」

ナースコールがぷーぷー鳴る。

ぷんぷん、という擬音が似合いそうな動きで病室を出ていった。

よく見ると物陰に翔がいる。勿論一部始終を見させてもらった。
さて、どうからかいますかと、翔は物陰から出て病室に向かおうとすると、その前にカエル顔の医者が上条の部屋へと入っていく。

「ナースコールがあったからやってきたけど……あー、これはひどいね？」

死ぬ、これはホントに死ぬ、という独り言を尻目にカエル顔の医者は続ける。

「けど、あれで良かったのかい？」

何がですか、と少年は答える。

「君、本当は何も覚えていないんだろう？」

ドアの前にいた翔は喉が干上がるかと思った。

透明な少年は黙り込む。

一人の少女に話して聞かせたほど、神様の作った現実は優しくも温かくもなかった。

先程の話は全てカエル顔の医者を通じて聞かされたもの。そんなのは他人の日記を読んでいるのと変わらない。

この包帯だらけの右手に神様の奇跡さえ殺せる力が宿っているとかいわれても、信じられるはずがなかった。

……それ以上は翔は話を聞いていない。聞く気も起きなかった。
あの透明な少年が今後それを隠して『上条当麻』として生きていくと誓った。何故だか、それを邪魔したくなかったのだ。

静かな足取りと共に、翔は病室を離れた。

透明な少年（後書き）

そういえば昨日投稿した短編小説が一晩でこの小説の総合評価越えたんですよ。

オーズのものなのですが、これが最終回パワーか…！って感じですよね（笑）短いのでお暇があれば読んでいただければ幸いです。

感想待ってます！

ではっ！

乱雑解放《ポルターガイスト》（前書き）

今回は悠斗サイドのお話！

翔「でばーん！！」

乱雑解放《ポルターガイスト》

「……」

深夜。幻想御手（レベルアッパー）の事件から数日がたった。事件自体は解決することができたが、解決してしまったことにより、幻想御手（レベルアッパー）を使って助けるはずだった子供たちを助けることができなくなってしまった。

「はぁ……」

悠斗は、どうしてもその子供たちのことが気がかりだった。確かに、ある日を境に突然連絡が取れなくなってしまったのだが、まさかこんなことになっているとは思いもしなかった。

『ゆうとにーちゃん！』

御坂が木山の記憶を垣間見た子供たちを、彼は思い出す。とは言っても木山よりも早く子供たちと会っていたため、若干幼い。

『すごーい！』

『カッコいい！』

能力を使っていたところを偶然見られた。最初はたったそれだけだった。

それからというもの、片っ端から彼のことを探しては、『のうりょく見せて！』などと言ってくる。最初は数人規模だったが、いつ

の間ににかクラス単位まで人数が増えていた。

最初は迷惑この上なかった。子供と思えは多少は可愛く見えたが、一言で言うとしつこい。それが原因で、友人からからかわれる。小さい子供だったので邪険にも出来ず困り果てていた。

「……？」

ベットがぐらぐらゆれる。最初はそう思ったが、すぐに地震だと気づく。普段だったら気にもとめないかもしれない。もともと日本は地震大国と呼ばれるほど、地震が多い。しかし彼にはこの地震が妙でしかたがなかった。ただ原因はまったく分からないのだが。

だがものすごく嫌な予感がする。だが彼は精神干渉系の能力ではないのでそれ以上は分からない。だが最近、黄泉川がよく警備員（アンチスキル）に呼び出されて家にいる時間がいつもより減っている。そのこと自体はどうでもいいのだが、気になるのが呼び出されている理由である。このことは本人から聞いても答えてくれない。

考えてダメなら調べてみろ。これはハッキングが得意な翔から聞いた言葉である。その理論はお前かお前の同類にしか通用しない。とツッコんでやったが、今この瞬間、実行に移そうかと思った。何をすればいいのか、とりあえずそれを考えることからはじめよう。そう思った彼は、目をつぶった。

【次の日】

相変わらず、夏休みボケで起きるのが１０時、１１時になっている悠斗は目を覚ますと、辺りを見渡す。部屋の外から聞こえる物音はない。どうやらまた黄泉川は出掛けているようだ。

「ったく……」

寝癖でボサボサになっている髪を適当に手をクシがわりに使い、ちょっとだけ整えると迷わずリビングへむかう。

ガチャ、と、ドアを開けると、リビングの机の上に無造作に置かれたＡ４用紙が何枚か散らばっている。

因みに時計は１１時半を指していた。

だがそんなこと気にも止めずにそのＡ４用紙を手に取ってみる。どうやら最近多発している地震の話らしい。たかが地震程度で警備員（アンチスキル）が動くとは考えづらいので、自然に起きている地震じゃない。

そう結論づけて彼は続きを読んでみる。

内容を簡単にまとめると、まず最近多発している地震は実は地震ではなく、能力の小さな暴走の同時多発による『乱雑解放（ポルターガイスト）』現象らしい。

『能力の小さな暴走の同時多発』……そんなことはあり得るのだろうか？

また、それに暴走に関わっていると思われるのが、『ＡＩＭ拡散力波』。通称『虚数学区』である。

嫌な予感は増すばかり。悠斗が紙を握る手には、汗がにじんでいる。

「『ＡＩＭ拡散力波』の……暴走……」

木山の生徒たちの実験は、能力を意図的に暴走させ、それが『ＡＩＭ拡散力波』にどう反応するかを調べるためのものではなかったか？

（確か、今日は警備員（アンチスキル）と風紀委員（ジャッチメント）の合同会議があるとか言ってたっけか？）

悠斗はＡ４用紙を雑に投げ捨てると、玄関へ足を早めた。

――――――――――――――――――――

「ここだっけか？」

既に建物の中に入っている悠斗は、少し大きな扉を誰にも気づかれないように、ゆっくりと開ける。監視カメラなどは、能力を使って一時的に映らなくしているので、後からバレる心配はない。

一番後ろで、こっそり能力を発動させ、目の前に薄く氷を張る。光の屈折具合を調整すると、薄暗いのと重なり彼の姿はかなり見えにくくなった。

手前のステージでは、黄泉川がマイクを片手に地震のことを説明する。

『……この乱雑解放（ポルターガイスト）の原因は『ＲＳＰＫ症候群』の同時多発じゃん』

「隠してやがったのかあいつ…」

やはり黄泉川は地震の原因を知りながら、彼にそのことを隠していた。

『ここから先は、先進状況救助隊の『テレスティーナ』さんから説明してもらおうじゃん』

黄泉川がそう言うと、ステージにめがねをかけた茶髪でスタイルのいい女性が現れ、黄泉川からマイクを受け取る。

『えぇ…ただいまご紹介いただきました、先進状況救助隊のテレスティーナです』

テレスティーナと呼ばれた女性は、一通り自己紹介を済ませると話を続ける。

『『ＲＳＰＫ症候群』とは、能力者が一時的に自律を失い、自らの能力を無自覚に暴走させる状態をさします。個々の現象は様々ですが、これが同時に起きた場合、暴走した能力は互いに融合しあい、一律に『乱雑開放（ポルターガイスト）』現象として、発現するというわけです。さらにその『乱雑開放（ポルターガイスト）』現象がその規模を拡大した場合、体感的には、地震と見分けがつかない状況を呈します。これが今回の地震の正体と

いうこととなります『ＲＳＰＫ症候群』の同時多発の原因については、目下調査中ですが……』

それから会議はスムーズに終わり、人ごみに混ざりながら悠斗は会場を後にした。

（……ま、あんま思いつめてもしゃあねぇし、今日はこれ以上の情報は期待できないだろうな。）

「……そういや今日花火大会だっけ、翔や当麻誘っていくか？」

ふと思いついた彼は、翔に電話をかけようと携帯を取り出した瞬間、電話がかかってくる。

「お？」

パカリ、と携帯の画面を開いてみると、画面に映っていたのは黄泉川の番号。

「……」

バレた？そんな考えが一瞬頭をよぎるがすぐに振り払う。そんなヘマはしていないはずだ。そう思った彼は恐る恐る携帯のボタンをプッシュ、耳に当てる。

『悠斗じゃんか？』

携帯にかけたんだからそうに決まってる。そうツッコもうと思ったりもしたがこらえる。

「なんかようか？」

『今日、花火大会があるのは知ってるか？』

「あぁ、結構大きな花火大会だろ？……ッ！？」

もう何を言われるのかよめた。確実に。

『ちょっと警備を手伝ってほしいじゃんよ』

「……わあったよ」

彼は居候の身である。家主には逆らえない。そんなことでしぶしぶながらそう即答する。

『そういってくれるとおもってたじゃん！』

電話の向こうで陽気な声が聞こえる。とりあえず死ねの一言で切ろうかとも思ったが、そこはこらえて、話の続きを聞く。

『とりあえず詳しいことはまた後で連絡するじゃん』

「へーへー」

プツン、と電話を乱暴に切ると、ため息をついて、アイスのストックを買いにコンビニへ向かった。

乱雑解放《ポルターガイスト》（後書き）

感想待ってます！

小さな叫び（前書き）

翔「でばーん！！」

悠斗「いい加減しつこい！」

小さな叫び

「悠斗、ここじゃん！」

悠斗は今花火大会の会場に来ていた。理由は言うまでもなく警備の手伝いである。

「ったく……いくらなんでも人使い荒いんじゃねぇの？」

黄泉川に呼ばれ、愚痴を交えながら悠斗は呼ばれた方向へ向かう。

「そんなことないじゃん。お前に会いたいっていう人がいるから呼ぶついでに手伝ってもらうじゃん」

「……会いたい人？」

それを聞いた悠斗は少し怪訝そうな顔をする。自分に会いたいとはどういうことなのだろうか世間ではたったのレベル2の自分に……。

「そうじゃん！」

そんな悠斗とは裏腹に人懐っこい笑顔を浮かべながら肯定する黄泉川。

「あなたが、古澤悠斗君？」

ふと、黄泉川とは別の場所から声がかけられらる。勿論黄泉川の

声ではない。

「……貴女は？」

その顔は、昼間、警備員（アンチスキル）と風紀委員（ジャッチメント）の合同会議の時に一度見ていた顔だった。その事に関する驚きは顔には出ていない。ポーカーフェイスと言うやつだ。あくまで自分は乱雑解放（ポルターガイスト）を地震として認識しているその他に分類される人間の一人だ。

声をかけてきた女性は長い茶髪を後ろで結び、メガネをかけている女性は、テレスティーナと呼ばれていた女性だった。

「貴方はかの御坂美琴さんと共に幻想御手（レベルアッパー）事件を解決に導いた立役者と聞いていたから、どんな人物は一度合ってみたかったの。迷惑だったかしら？」

テレスティーナは黄泉川と違い、他人行儀な丁寧な笑みを浮かべながら彼に話しかける。

「いえ、そんなことはないですけど……それだったらレベル２の俺よりレベル５の御坂美琴のほうが良かったのでは？」

悠斗は慎重に、言葉を選びながらテレスティーナの問いかけに応じる。いろんな事がばれたくない。

「だからよ。レベル５だと私みたいな人が会うには色々大変なの。それに、レベル２の貴方がどうやって幻想御手（レベルアッパー）事件を解決に導いたかも知りたいしね？」

「……俺は御坂美琴のバックアップを行っていただけですよ。レベ

ル2の俺が前線に出ても勝てる見込みは薄いですしね」

あくまでも淡々と、どんな小さな不審がられるような動きや言葉も出さないように、細心の注意をはらって話を続ける。

「……そう？今の貴方を見ていると、とてもそうには見えないけれど」

「……」

驚きは表情に出なかった…と、思う。

「クスッ、冗談よ。じゃあ、また後で」

テレスティーナは小さく微笑むと、そういって持ち場へ戻っていった。自分の素性がばれることは無かったようだ。

その事にほっとしていたためか、彼は一つ見落としていた。黄泉川を通じて情報操作されていたはずの幻想御手事件（レベルアッパー）。自分は関わっていないことになっていたはずだと言うことを……

それから約一時間がたち、花火大会が始まった。夜店や屋台で賑わい、浴衣を着た人たちが行き交うなか、警備にあたっている警備員（アンチスキル）や先進状況救助隊は、かなり浮いた存在となっている。

そして悠斗はその浴衣姿をしている人間を流し見していると、先程テレスティーナを欺くために話題に出した御坂が白井や初春などと一緒に花火大会を楽しんでいる姿を発見し、とりあえず彼女らの視界に入らないように物陰に隠れた。

「めんどくせぇことになったなぁ……」

適当に出していたパイプ椅子に座りながら悠斗はため息をつく。

黄泉川たちは既に別の場所を警備していて、自分は緊急の時に呼ばれるかもしれないという。本当についでだと思い知らされた悠斗は、再びため息をもらした。

警備がてら夜店を回るという手もある。しかし一人で花火大会を楽しむなど悲しいにも程がありすぎる。しかも運悪くその姿を御坂たちに見られでもしたら、間違いなく川にダイブして二度と浮かんで来ないだろう。

よってその案は最終手段どころか、速攻却下だ。

「これを不幸と言わずして、何を不幸と言うのやら……とりあえず、不幸だ……」

まぁ近くにいればどこにいてもいいらしいので、とりあえず近くのコンビニでアイスでも買いに行こうかと席を立つ。

「……」

コンビニを探して土手を歩いていると、バァン！、と花火が打ち上げられる音がする。その一発を引き金に、何度も花火が真っ黒な

夜空を幻想的に照らし出す。

その光景に、悠斗は思わず足を止め、花火を眺める。が、アイスの方が優先順位が上だったのか、花火を眺めながらも、再び歩き出した。

そんな中、それは突如として起きた。物凄い地響きと共に地面が大きく揺れる。

「な……ッ！？」

悠斗は咄嗟に氷で足場を作るとそれに乗り、ふわりと数センチ浮き上がる。

「でかいな……こりゃあ忙しくなりそうだ！」

氷の足場を地面に沿って動かすと、助けが要りそうな場所へ向かう。

少し道路に沿って移動していると初春と佐天、それから初春が庇うように覆い被さっている一人の少女。

「やべぇって！？」

悠斗は急いでその方向へ向かう。ただ揺れていて危険だからというだけではない。道路の脇にある電信柱が今にも彼女たちの方へ倒れようとしているからだ。

「初春っ！」

近くで手すりに掴まっていた佐天が声を張り上げた瞬間、初春と少女に向かって倒れていた電信柱は一瞬で凍りつき、粉々に砕け散る。

「え……？」

あまりに急な出来事に佐天は思考が追いつかなくなる。そしてまだ少し揺れる地面の上を走りながらこちらに向かってくる人影が向かいに見えた。

「えっと…花飾り！大丈夫か！？」

初春の名前をど忘れしてしまったのか、適当な特徴を見つけ、そのあだ名を叫ぶ。

「古澤さん！？どうしてここに？」

悠斗の姿を見た初春は驚いたように叫ぶ。まさか御坂と共に幻想（レベル）御手（アッパー）事件を解決した人物がここにいるとは思っていなかったのだろう。

「そんな事よりそっちの子も無事か？」

そんな初春の驚きを無視して悠斗は彼女が庇っていた少女の身をあんじる。と、言っても唯一彼女らを傷つける可能性があった電信柱は既に破壊したので、傷ついていることはないのだが、精神面は分からない。

「あっ……はい！大丈夫です！」

悠斗に言われ、初春はすぐに少女の体を確認する。怪我はなかったようだ。遅れて御坂が白井と共にやってくる。

しかし、乱雑解放（ポルターガイスト）も収まり、危機はとりあえず去ったというのに少女の顔は浮かない。

「何処なの……？」

少女は一人、誰にも聞こえないぐらい小さく呟いた。

その後、警備員（アンチスキル）や先進状況救助隊が慌ただしく動き始めたのは言うまでもない。

小さな叫び（後書き）

翔「出番と感想待ってます！」

悠斗「だーかーらー！」

交錯する思い（前書き）

新学期始まってから更新速度一気に落ちた感じしますね。

交錯する思い

重傷者や死亡者を出すことなく花火大会は終了することが出来た。悠斗は仕事を片付けると、とっとと家に帰る。本人曰く『俺の中のアイス成分がなくなりかけてる』だそうだ。

これは後から分かったことなのだが、今回の乱雑開放（ポルターガイスト）はＡＩＭ拡散力波への人為的な干渉である可能性があるらしい。人物の特定まではまだ出来ていないようだが。

家に帰った悠斗はパソコンの前に座っていた。すぐ隣の机には空のカップアイスがいくつも転がっている。

「……ＡＩＭ拡散力波への人為的な干渉…てことは『幻想猛獣《ＡＩＭバースト》』に近いところもあるのか？あれは『幻想御手（レベルアッパー）』使用者のＡＩＭ拡散力波に干渉して意識を縛り付けていたようなものだしな……」

パソコンをいじってはいるが、彼には流石にハッカーの真似事はできない。せいぜいネットに転がっている情報を片っ端から見ていくぐらいしかできない。しかしながらそんな方法で漠然としたわだかまりを解消できるはずもなく、パソコンの電源を切った。

（まさかと思うが木山が関係してるってことは……ねぇか）

自分で考えたことを自分で否定する。今木山は絶賛拘留中。刑務所の中にいてそんなことを起こせるとは考えにくい。

「そういや白井たちは何か掴んでっかな…明日にでも聞いてみるか」

アイスのごみを適当にゴミ箱に放り投げると、自分の部屋に向かった。ちなみに黄泉川は先の乱雑開放（ポルターガイスト）のせいで夜中まで仕事中だ。

（そういや花飾りといたあの子……）

悠斗は初春が庇おうとしていた少女を思い出す。あの子は乱雑開放（ポルターガイスト）が収まった後、心ここにあらずといった様子で何かをつぶやいていた。引っかかることがまた増えてしまった。

「はぁ……」

とりあえず明日することも決まったのでベッドにダイブする。今日は能力も少し使ったし、乱雑開放（ポルターガイスト）にも巻き込まれ、正直疲れてたりする。

そのためか、昨日よりかは早く眠りにつくことができた。

次の日、悠斗は白井たちがいる風紀委員（ジャッチメント）の177支部へ来ていた。

「う～っす。昨日の乱雑解放（ポルターガイスト）の話なんだけど花飾りと一緒にいた女の子いるか？」

悠斗はそんなこといいながら部屋の中に入って行くが、そこで見たのは何故か机の上にいくつもあるコンビニ弁当と、その机の前の椅子に座っている固法の姿だった。

「あぁ、いらっしゃい」

「……」

固法は何気なく応じるが、弁当の数をざっと数えると5、6こはある。それを見た悠斗は一瞬言葉を失ってしまう。

「えっと……？」

「ふっ、古澤さん。こっちですよー」

佐天が助け船を出してくれた。彼女とは昨日知り合ったばかりだが、普通に話せる程度には打ち解けている。

「お、おう」

そしてとりあえず佐天の助け船に乗ることにした悠斗は、彼女の元へと向かった。

「……そういや花飾りは？」

ふと部屋を見渡した悠斗はそこで初春がいないことに気づいた。そしてその疑問には佐天が答える。

「初春は春上さんと一緒に遊びに行ってますよ」

「なるほどな」

春上と言う名字は初耳だが、おそらくあの少女だろうと勝手に解釈してみる。

「アンタ、さっき誰に会いたいっていってた？」

少し浮かない顔をした御坂が、話しかけてくる。

「ん？昨日花飾りと一緒にいた女の子。春上……で、いいのかな？」

御坂はなるべく平然を装うとしているが、正直素人の演技など簡単に見抜ける。彼はそんな世界で生きてきた時期もある。相手の言葉が演技かそうでないかを疑わなければいけないような…。

「…なんで、春上さんに会おうとしてたの？」

「……それだと、お前も違和感かなにかを感じてんだな」

御坂の表情が目に見えて変わる。後ろで見ていた白井もそうだ。どうやら二人も彼と同じような違和感を春上という少女に感じていたらしい。

と、その時固法の声が、彼らの会話を遮断する。

「自然公園で乱雑解放現象（ポルターガイスト）！？」

「自然公園って……初春たちが！？」

「またかよ！？」

また彼らの知り合いがいる場所で乱雑解放（ポルターガイスト）現象。下手したら悠斗の知り合いであるツンツン頭の不幸少年よりも不幸かもしれない。

だがそんなふざけた事は言っていられない。とりあえず初春と春上の安否ぐらいは確認しなければならないが、電話は繋がらない。

遠距離から安否を確認する手段が無いなら直接向かえばいい。とにかく彼らは急いで自然公園へ向かった。

彼らはある病院に着く。初春から連絡があり、その病院にいると言ったからだ。なかにはいるといたのは沢山の怪我人。そね中に初春を発見する。

「初春！大丈夫！？」

一番最初に声をかけたのは親友である佐天だった。

「はい。私は膝を少し擦りむいただけだったので」

初春は意外にも軽傷ですんだようなので、佐天は思わずほっとする。

「心配したんですのよまったく…」

佐天に続いて白井も初春の元へ歩み寄っていく。その顔には心配と安堵の表情が織り交ざっていた。

「そういえば、春上さんは？」

ざっと辺りを見渡したあと御坂は、春上がいないことに気づく。

「春上さんは先に病院に運ばれたんですけど、気を失っちゃってるみたいで……」

「初春、乱雑開放（ポルターガイスト）の直前、春上さんの様子に変わったところはありませんでした？」

白井は初春の言葉を聞いた後、意を決したように質問をする。実は白糸御坂は書庫（バンク）へハッキングをし、春上がレベル２の精神感応（テレパス）であることを突き止めていた。精神感応（テレパス）の能力を応用して乱雑開放（ポルターガイスト）を発生させることができる可能性は０ではない。そして春上の行くところでそれは起きてしまっている。

「……」

悠斗も薄々気づいていたことだ。春上はの以前いた学区では乱雑開放（ポルターガイスト）が多発していたらしい。そして彼女がこっちの学区へ来たとたんにこれだ。

「え？あの……いったいなんの…」

初春の戸惑ったような声を白井の冷静な声が遮る。

「私が調べたところ、春上さんはレベル２ながらちょっと変わった精神感応（テレパス）ですの…もしあの時と同じような不振な挙動がみられたとしたら……」

「なんで……」

初春の震えるような声が白井の耳に届く。

「なんでそんなこと調べたんですか？……まさか白井さん、春上さんを疑っているんですか？」

「そ…っそう言う訳では……」

友達を疑うのも疑われるのも決していい気はしないだろう。そのことから白井は言葉がつまってしまう。しかし、治安維持のためには仕方ないこととともいえる。犯人が分からない以上、誰かを疑わなければ話が進まない。その対象の一人がたまたま知り合いだったというだけだ。

それを見ている御坂も佐天も戸惑った表情をしていて、唯一悠斗だけが無表情のまま、少し離れて今の事態を静見していた。話に入るつもりはこれっぽっちもないらしい。

「ひどいです白井さん……春上さんは転校していたばかりで、不安で、私たちを頼りにしてて、それなのに……それなのにっ！」

まさに一触即発といった感じになりかけた雰囲気を、誰かの声が砕いた。

「精神感応（テレパス）が、ＡＩＭ拡散力波への干渉者になる確率はなくはないわ」

先進状況救助隊、テレスティーナだ。さっきの話は途中から聞い

ていたらしく、話に割って入ってくる。

「けど、それには最低でもレベル４以上の能力が必要だわ。レベル２にその可能性があるとは少し考えにくいと思うけど、念のため、ちゃんと検査したほうがいいのかもしれないわね。お友達の名前は？」

「春上衿衣さんですの」

白井が春上を庇う様子もなく、間髪いれずに答えてしまったため、初春の表情に明らかな怒りがともる。

「……バカばっかだな」

ただ彼女たちを眺めていただけだった悠斗の小さな呟きが、怪我人であふれかえっている病院のオフィスへ消えていった。

交錯する思い（後書き）

翔「感想待ってます！」

悠斗「お前が言うのか！？」

翔「だってここしか出れないんだもん！」

悠斗「……なんかごめん」

精神感応《テレパス》（前書き）

うーむ……短めになってしまったな。

翔「ディケロクだったら毎回こんなもんじゃないか？」

でもこの小説史上最短となってしまったな。

翔「始まったばかりで何を言う」

精神感応《テレパス》

場所は先進状況救助隊付属の研究所。

「……」

ここで春上の検査を行っているわけだが、初春と白井はなんの意地を張っているのか、お互いまったく口を聞こうとしないため、ギシシャクした空気が辺りを覆う。

そんな二人に苦笑を交える佐天と御坂。少し離れたところで悠斗は壁に寄りかかっていた。彼は彼で何故か誰も寄せ付けないような雰囲気を放ち、とてもじゃないが話しかけるのは無理だ。

「検査が終わったわ」

そんな御坂と佐天に助け舟が舞い降りる。テレスティーナだ。検査が終わればこの居心地の悪すぎる空間から出て行くことができる。

「あのっ！それで春上さんは…！？」

「慌てない。結果が出るまでは時間がかかるわ」

そして彼らはテレスティーナにつれられとある一室につれてこられていた。その部屋は研究所というにはあまりにかわいらしい部屋だった。窓際に、クマのぬいぐるみやリス、ウサギのぬいぐるみもある。

「なんか研究所って感じじゃないですよね……凄いセンスっていうか……」

「やっぱり不思議？こういうこんな仕事してると純粋なものが好きって意外に思われるのよね」

「じゃこれって……」

「私の趣味」

驚く佐天をよそに優しく微笑みながら彼女らを向かいのソファーに座らせるテレスティーナ。

「じゃあ改めて、先進状況救助隊付属研究所所長、テレスティーナです」

「……っ所長！？」

以前名乗っていた役職とはまた別の地位。その事に御坂は声を出して驚く。

「……」

唯一ソファに腰かけていないで、壁にもたれ掛かっていた悠斗の顔がそれを聞いたとたんに険しくなる。

「古澤くん、どうかした？」

それに気づいたテレスティーナは悠斗の顔を見ながら質問するが、彼は素っ気なく「何でもない」と答えるだけ。仕方がないのでテレ

スティーナは話題を変えた。

「そういえばあなた達の自己紹介がまだだったわね？」

ソファに座っている御坂達を見ながらテレスティーナは言う。

「常盤台中学の御坂美琴です」

「御坂美琴ってあの超電磁砲（レールガン）の？こんなところで会えるなんて光栄だわ」

以前テレスティーナは幻想御手（レベルアッパー）事件を解決した悠斗や御坂に会ってみたいと言っていた。そのためか、彼女は『御坂美琴』という名前に反応した。

「私は佐天涙子です」

「風紀委員（ジャッチメント）１７７支部、初春飾利です……あの！春上さんは……！？」

よほど春上のことが気になるのか、初春はどうしても声を張り上げてしまう。

「あなた、好きな色は？」

唐突だった。あまりに急だったため、初春の焦りは見事に空回りしてしまう。

「え……あの……」

「いいから、何でもいいから言ってみて？」

困惑する初春をよそにテレスティーナは微笑みながら続ける。

「強いて言えば、黄色…ですかね」

「手を出して」

初春はとりあえず彼女のいうことを聞き、手のひらを差し出す。するとテレスティーナは棒状のチョコのケースを取り出すと少し振り、ふたを開け、中にあるチョコが一つ初春の手のひらに落ちる。

黄色だった。驚く初春をなだめるように彼女は言った。

「あら、幸先いいわね」

優しく微笑むテレスティーナの真意がわかるものはこの場に誰もいない。

◆◆◆

春上の検査が終わり、彼らは彼女のいる病室に来ていた。

「時々、声がするの」

ふと、春上はそんなことを初春に話始める。

結論から言えば、春上は白だった。

やはりレベル２の精神感応（テレパス）では、ＡＩＭ拡散力波を掌握するなど

不可能。彼女の能力は特定の条件下では、本来のレベル以上の能力を発揮できるようだが、それは特定の人物と交信するときに限るようで、今回の事件との関連性は極めて薄いと言わざるをえない。

「声……？」

初春は、春上の言った事がいまいち分からないといった様子で疑問の声を出す。

「それって、精神感応（テレパス）の…」

「たまにだけど」

御坂の声が聞こえたのか聞こえなかったのか、春上は首から下げているペンダントのロケットの部分を握り閉めながら続ける。

「それを聞いてると、なんだか頭がぼーっとしちゃって」

「そのペンダントは？」

気になったのか、それを聞いたのは意外にも悠斗だった。特に意図があって聞いた訳ではない。ただ、何故か聞くべきことだと思ってしまった。

春上は面識の薄い悠斗に対して答えるべきかどうかを少し迷った後、ゆっくりとした口調で話始める。

「今はどこにいるかも分からない親友との、大事な思い出……」

そういいながら春上はロケットの中にある小さな写真を見つめる。

そこに写っていたのは、カチューシャをつけている少女だ。それだけなら春上の親友の写真ということで終わっていたかもしれない。しかしそれではどうしても終われなかった。

見覚えのある顔に驚いた表情をしたのは御坂と、悠斗だった。御坂は見た。木山春生と戦った時に、木山の記憶を垣間見たときに。木山の生徒の一人として。

しかし悠斗は御坂以上に衝撃を受けていた。固まる彼に、御坂意外にこの部屋にいたものは不審そうな顔をするが、今の彼はそれに構っている心の余裕等ない。

ただ呆然と、その場に立ちすくんでいた。

だから、だからこの場にいる誰も気づくことができなかった。部屋の出入口付近で、妙に唇をつり上げているテレスティーナの存在に。

精神感応《テレパス》（後書き）

翔「感想待ってます！」

悠斗「本格的に前書きか後書きにしか出れなくなってきたな」

翔「だーまーれー」

近づく真実

夕暮れ、悠斗たちは研究所から帰りのモノレールに乗っていた。

テレスティーナから、春上から聞いた情報はこうだ。まず、春上は友達の精神感応受け取っている。その友達は木山春生の生徒で、その子供たちを被験者に、超能力の暴走誘爆実験を行っていたのが、木原幻生と呼ばれるマッドサイエンティストであるらしい。

つまりだ。春上の次は、木山の生徒たちが容疑者ということになる。

「じゃあ、木山春生の生徒たちが乱雑解放を起こしてるっていうんですか！？」

佐天に事情を説明した白井だが、当然、驚きの声を上げる。

「えぇ、まだ仮説ですけど……」

「その子たちを見つけない限りは、何も分からないわね」

「見つけるって…どうやるんです？」

「それは……」

佐天の質問に白井は気まずそうに初春の方を向く。自分が正しいと思って春上を疑ったのだが、当然良心は揺さぶられたし、あまり

良い気分はしない。

「……勿論探します。探しますけど……春上さんの次は、その友達を疑うんですか？」

春上の言葉に白井は、はっとした表情になる。なるべく考えないようにしていたことをそのまま言われれば誰だってつらい。

「古澤さんだって、自分を慕っていてくれていた子供たちをこんな風に疑われて悔しくないんですか！？」

「初春っ！」

隣ではなく向かいの席で外の景色を何食わぬ顔で眺めていた悠斗に、そんな言葉が飛んでくる。佐天が怒鳴るがお構いなしだ。ちなみに木山の生徒たちとの接点は話がややこしくなる前に話してある。

「……そうだな……」

悠斗がポツリと口を開けた。彼は、なぜか御坂たちの前だと感情を表に出すことがあまりない。

「お前は春上が疑われたとき、『絶対に違う』。あるいは『たとえ犯人だったとしても故意的に事件を起こしていない』と思ったか？」

悠斗の声だけがその車両に響く。

「当たり前ですっ！」

初春は迷うことなく即答する。だが悠斗は特に何かに反応するわ

けでもなく言葉を返す。

「だったら春上が調べられるのに抵抗したんだ？」

「それは春上さんが疑われるのが……っ！」

「それで検査を回避したら春上は疑われたままだぞ？」

「……ッ！？」

初春の反論が止まる。悠斗は構わず続けた。

「もし春上が犯人だったらこのまま一生この街は乱雑開放（ポルターガイスト）が永遠と続くかもしれないし、たとえ止まってもそれは収まっただけで解決したわじゃない」

「……」

「それにあの子を信じてんなら検査したってシロなはずだろ？特に拒む必要性はないだろ？あのガキどもに意識があるとは考えづらい。だったら誰かに無理やり能力を使わされてると考えた方が妥当だ。だったら疑いを晴らすより先に助けてやるべきだ。違うか？」

悠斗の問いに初春は答えない。いや、答えられない。

「ま、そういうこった。確かに友達疑われるのはアレかもしれないが、それでキレんのも筋違いってもんだぜ？」

そこまで言った悠斗は、再び窓の外にある夕焼けに視線を戻した。

◆◆◆

次の日、彼はテレスティーナに呼ばれ、ある喫茶店に来ていた。

ちなみに彼はテレスティーナとの連絡手段は持ち合わせていないため、御坂経由であるのだが、それは今には関係のない話である。

来ているのは、テレスティーナと悠斗。それから御坂と佐天だ。白井たちは支部に戻って子供たちの行方について調べている。

そしてテレスティーナから放たれた衝撃の一言は……。

「えぇっ！？」

「木山春生が保釈だぁ！？」

悠斗も御坂も思わず声を上げてしまう。当たり前だ。木山は子供たちを助けるためとはいえ、一万人もの能力者たちを利用し、昏睡状態に追い込んだのだ。そんな人間がそんなすぐに保釈されるなど考えづらい。

「えぇ……例の実験に関して話を聞こうと留置所に行ったの……」

「アレだけのことをやっておいて、保釈が認められるんですか！？」

御坂が問いかけたことは誰でも思うことだ。先にも記した通り、そんな簡単に釈放されるとは思えないほどの事件を彼女は起こしている。

「詳しい事情は分からないけど、そうみたいね…」

テレスティーナも何か釈然としない表情をしながら話を続ける。

「しっかし……木山が子供たちを使って乱雑開放（ポルターガイスト）を起こしてるって考えてるわけか」

「そうね、一万人もの子供たちの能力への憧れすら利用した女よ。やりかねないわ」

（子供たちを使って……ねぇ）

悠斗は自え分で言った言葉に対して自分で否定する。『使って』というよりは、おそらく『助けるため』に乱雑開放（ポルターガイスト）を起こしていると考えるのが妥当だと思う。

◆◆◆

「ここか」

夜。悠斗はある閉鎖された施設を眺めていた。看板には『先進教育局』と書かれている。彼はふとここへたどり着くまでのいきさつを思い出す。

『木原幻生の暴走能力誘爆実験を行った場所を今すぐ調べて欲しいだぁ？』

「おう」

『その実験のことに関する事件、前に解決したんじゃなかったっけ？』

「いや、まだ終わってない。調べられるか」

『分かったよ。ちょっと30分ぐらい待ってろ』

携帯で話しているのだが、いったん通話を切って、しばらくして電話がかかってくる。そして教えられた場所がここだ。

（木原一族……俺の友達を……俺たち置き去り《チャイルドエラー》を一体なんだと思ってやがる……ッ！俺から大切なものをいくつ奪えば気が済むんだよ……ッ！）

悠斗は気がつけば手のひらから血がにじむほど強く拳を握っていた。落ち着くために何回か深呼吸した後、中に侵入する。その後すぐに来たカエル、ゲコ太というらしいのだが、とにかくのお面を持った少女に気づかずに。

（電気も通ってない……か。もぬけの殻だな）

ふとある部屋に入ったとたん、悠斗の動きが止まる。

「御坂か？」

部屋のだだっ広い部屋の中に一人たたずんでいた少女に話しかける。少女は驚いて振り向くと、知り合いの顔だったためか、ほっとため息をつく。

「アンタ、どうしてこんなとこいんのよ」

「それはこっちのセリフだ。しっかし違う方向から調べてお互いがここにたどり着いたってんなら、やっぱここに何かが残ってる確率が高いわけか」

「ううん、多分空振りだと……」

「――ッ！？御坂、こっちだ」

御坂が何か言いかけると同時に悠斗がいきなり手を引っ張る。

（誰かいる）

部屋から出ながら悠斗は小さくつぶやく。それを聞いた御坂も表情をこわばらせる。だが、誰もいないはずの静まり返った部屋だからこそ、その誰かの声は鮮明に聞こえた。

「何も残っていません。えぇ、引き上げます」

（（……この声…ッ！？））

二人は聞き覚えのある『誰か』の声にの元へすぐさま向かう。隣のドアを勢いよく開けたその先にいたのは、

「……木山」

「――っ……君たちか」

いきなりのことの木山は若干驚いたような表情をした後、以前と変わらない格好でそこに立っていた。

近づく真実（後書き）

翔「ちょっと待て……悠斗との電話の相手って……」

悠斗「誰だったけ？忘れた」

翔「おいっ！？」

悠斗「感想待ってま～す」

救える者と救えない者（前書き）

タイトルは上条さんとステイルのことじゃないです（笑）

そして駄文です。

救える者と救えない者

御坂美琴と古澤悠斗は木山春生の車に乗っていた。高級そうな青いスポーツカーだ。

「一体どこに向かってんのよ」

助手席に座っている御坂は警戒心を解くことなく、木山に話しかける。

「あいつらがいる場所……ってとこか？」

答えたのは木山ではなく悠斗だ。後部座席に座っている彼は、目を合わせようともせず、外の景色を眺めながらそう言った。

「『あいつら』…？ってまさか！？」

何かに気づいた御坂は驚愕の声を上げるが、そうこうしているうちにどこかの建物の職員通用口の手前に車が止められる。

結局『あいつら』が誰のことなのか分からないまま建物の中に案内される。だが気にかかるのはここが病院ということだ。あまりこれから知らされることがいいこととは思えない。

そしてある部屋の自動ドアが開かれた瞬間、御坂は絶句の表情を浮かべる。

「これは……ッ！？」

「言うまでもないだろ……私の、『教え子』たちだ」
「……ッ！やっぱり…乱雑開放（ポルターガイスト）を起こしていたのはアンタなのね！？」
次の瞬間御坂が激昂する。
「そうだ」
それに対して木山は否定するわけでもなく、簡単に、一言で肯定した。聞く人によれば冷徹に聞こえたかもしれない。少なくとも御坂はそうだった。
バチッ！っと彼女の前髪の辺りが帯電する。だが次の動作をする前に誰かの声がさえぎった。
「けど、それにはちょっと複雑な事情があってね？」
出てきたのは、以前幻想御手（レベルアッパー）事件のときに被害者の脳波パターンが全て一致しているという重大なヒントを与えてくれたカエル顔の医者だった。
「それとここは病院なんでね、電撃は遠慮してもらえないかな？」
「あのときの……」
言ったのは御坂ではなく古澤悠斗。この部屋に来て一言も発することのなかった彼の口がようやく動いた。

「いったい…何がどうなって……ッ！？」

「『木原幻生』……彼が全ての始まりなんだね」

「レベル６……『神ならぬ身で天上の意思にたどり着くもの』…か」

カエル顔の医者に呼応するかのように悠斗はつぶやく。

「あんときは気づかなかったが……もしかしてお前、『冥土帰し《ヘヴンキャウンセラー》』か？」

「その通りだけど、今はそれについて言及する必要はないよね？」

「まぁそうだな」

「じゃあ話を戻すけど、木原幻生が暴走した能力者から取り出した『能力体結晶』。あの子供たちが受けたのは能力暴走誘爆実験じゃなくて、この『能力体結晶』の投与実験なんだね」

「そんなっ……！？それこそいったいなんのために！？」

そこまで聞いた御坂は今夜何回目になるかも分からない驚愕の表情を浮かべる。能力暴走誘爆実験は暴走能力者の解析が目的となっていたはず。ならばこの『能力体結晶』投与実験の目的は？

「レベル６……だろ？」

「そんな……」

悠斗の答えに御坂が揺れる。比喩ではなく、本当にショックで重

心が安定していないのだ。

「レベル6なんて取っ掛かりも見つかっていないようなもののために、この子たちはこんな風にさせられたって言うの！？」

自然に握られた拳にさらに力が加わる。それこそ、血が滲むほど。それは悠斗にしたって同じこと。できることなら今すぐ木原幻生を見つけ出してこの手で八つ裂きにしてやりたいところだ。しかし木原幻生の居場所はつかめていないし、たとえ彼を殺せたとしても子供たちの意識が戻るわけでもない。

「僕にできるのは、医者としてこの子達を救うことだけだ」

「だがここの設備を使えたおかげで、この子達を目覚めさせるめどがついた」

ある意味救いの言葉だった。今まで伏せられていた悠斗の顔が、今はじめて前を向く。

「だが目覚めさせようとすると、乱雑開放（ポルターガイスト）が起こるってとこか？」

図星だった。考えてみれば納得もいく。この子供たちの中には未だに『能力体結晶』が残っている。そのまま無理に起こそうとすると能力が暴走してしまい、結果的に『乱雑開放（ポルターガイストを）』引き起こしているということになる。

「なにか…方法はないの？」

何かにすがるような御坂の声が部屋に響く。

「暴走を沈めるワクチンソフトを開発している。ただ、『能力体結晶』の根幹をなしているのが『ファーストサンプル』と呼ばれる最初期の人体実験の被験者から生成された成分だ。ワクチンソフトを完成させるには、どうしてもそのデータの解析が必要なんだ」

「もし、見つからなかったら？」

御坂の口から残酷なｉｆの話が放たれる。木山の中の答えはすでに決まっていたのか、特に考える時間を必要とせずにすぐに質問の答えを話す。

「この子たちは、覚醒させる」

予想通りの一言だった。

「そんな……乱雑開放（ポルターガイスト）が起こるって、たくさんの被害がでるって分かってて！？そんなこと…」

「――そう。そんなことはさせない」

不意にこの場の誰でもない女性の声が響き渡る。それと同時に自動ドアが開く音が部屋中に響いた。

「テレスティーナさん！？」

そう。自動ドアを開けた先に立っていたのは駆動鎧（パワードスーツ）を身にまとった部下を引き連れたテレスティーナだったのだ。

「ごめんなさい、後をつけさせてもらったわ」

困惑する御坂よ悠斗にそう言うと、彼女は木山に向き直る。

「先進状況救助隊です子供たちを保護します。おとなしく我々に従ってください」

「それは命令か？」

「えぇ。レスキューとして、学園都市に被害が出る事態は断固阻止します」

「しかし……」

「先程話しにあった『ファーストサンプル』。我々ならば合法的にそのデータを入手できる可能性が非常に高いです」

「…ッ！？」

反論の余地はない。確かにここは病院だ。人命救助の場所としては何一つ間違っていない。しかし言葉を返すことはできなかった。

「保護しろ」

その一言で駆動鎧（パワードスーツ）たちはその足でどかどかと部屋の中へ侵入してきた。その行動は、暗に抵抗は無駄だと告げているようにも見える。そして……

◆◆◆

そして、全てが空っぽになった。子供たちは全て運び出され今頃は先進状況救助隊の付属病院なり研究所なりに運ばれていることだろう。

だかもぬけの殻になったのは部屋だけではない。木山の心にもぽっかりと修復が不可能なぐらい巨大な穴が開いた。

「……テレスティーナ……」

ポツリと誰かがつぶやいた。

裏切り（前書き）

なんか今回は物凄く簡略化してるというか、大雑把というかはしょってるというか……

つまり展開が早いですが気にしないでください。

裏切り

「そう。子供たち、見つかったんだ」

風紀委員（ジャッジメント）の１７７支部。白井たちの支部だ。アレから一夜明けた今日。こうして彼女たちは集まっている。悠斗の姿はない。

「よかったじゃん初春！」

佐天が初春の肩をバンバン叩きながら喜びの声を上げる。行方不明の子供たち１０人が一気に見つかったのだ。普通に考えれば喜ばしい。

しかし当の初春はいまいち実感がわかないのか、ぽかんとした表情を作った状態で固まっている。

「けど、今回の事件にもあの木山が関係していたなんてね」

「子供たちが目を覚ますなら、学園都市が壊滅してもいいなんて、無茶苦茶にもほどがありますわ」

固法の言葉に白井はため息混じりに反応する。確かに、いくら子供たちを助けるためとはいえ、ひとつの都市国家を丸ごとつぶそうと考える人間はそうそういない。

「それで、枝先さんたちを起こす方法は、テレスティーナさんが見つけてくれるんですよね？」

佐天としては何気のない質問だったのかも知れないが、それに対して御坂は何故かぎこちなく肯定する。

「とりあえずは『一件落着』、ですわね」

ぱん！　と、白井が手を一回叩きながらそういった。

そう、これで、子供たちが見つかり、乱雑開放（ポルターガイスト）も収まり、子供たちの意識が戻る方法も見つかり、それでおしまい。の、はずだ。

◆◆◆

どこかの古いアパート。ここでカタカタ……と、すばやくパソコンのキーボードを打つ音が聞こえる。

（悠斗の奴が言ってた『暴走誘爆実験』……実態は『能力体結晶』の投与実験……）

色々自分色に染めていそうなパソコンの画面を眺めながら心の中で情報を反復させる少年が一人。

（責任者の木原幻生は行方不明。実験台の子供たちは意識不明のまま眠り続けてる。…か）

「あいつ、いったい俺に危ない橋を何回渡らせるつもりだよ」

彼が、悠斗が自分に頼んできたことは大分大きな事件に発展しそうなことばかりだ。彼が毎回そんな事件の中心にいるというわけで

はないだろうが、なんか人使いがかなり荒い気がする。なんだかんだいって人命が係わってたりするのでやるのだが。

基本は頼まれてからそのデータがありそうなサーバーに忍び込むのだが、今回は何か引っかかりを感じ、自分でこうして深くまで調べたのだ。

（『能力体結晶』の最初期の被験者は木原幻生の実の孫娘、テレスティーナ・木原・ライフライン。狂ってんな。自分の家族を使った人体実験とか……）

「テレスティーナ…？あれ？どっかで聞いたことあるような……」

そこまで思った少年、天道翔はとりあえず気分転換についでにこのことを悠斗に伝えることにした。このとき彼は、その事件に物理的に干渉するとは思っても見なかった。

そしてそのころ、木山とともに初春がテレスティーナのところへ行ったところ、彼女が目的としていた子供たちを手に入れたためボロを出した。

そこから御坂たちもテレスティーナのミドルネームに気づき、行動を開始していたころだった。主に、御坂の単独行動であるが……。

◆◆◆

「だましたわね」

御坂は今、ほかのものとは型がまったく違う紫色の特殊な駆動鎧（パワードスーツ）に身を包んだテレスティーナと対峙していた。

「フフフ……怒った？」

御坂と、レベル5第3位と敵として対峙しているにも係わらずテレスティーナは余裕を崩さない。駆動鎧（パワードスーツ）に絶対の自信があると暗に告げているようにも見える。

「いったい何をたくらんでるの？」

しかしそんなこと御坂自身にとってはあまり関係のないのかもしれない。

「木原幻生の孫娘……それでいて『能力体結晶』の最初の被験者。おじいさんの実験台にされるなんて……。なのに、アンタは木原幻生の研究を手伝い、子供たちを連れ去った。いったいどう言うつもりなの！？」

キッ！と御坂に睨まれるテレスティーナ。だがそれを聴いた瞬間テレスティーナは耐えられなくなったように、笑い出した。

「アハハハハハ！よく調べたじゃねェかおりこうさァん。けどなァどういうつもりと聞かれて答えるやつはいねェんだよブァーカ！そんなに知りたきゃ力づくで言わせてみろや」

あからさまな挑発。御坂は可能性に気づくべきだった。なぜ学園都市最高位の能力者、軍隊を一人で鎮圧させることができると比喩されている人間を目の前にして、ここまで余裕をたもっていられたのか。

能力者に対して何か絶対の兵器を準備していた可能性を。

しかし今の怒り狂った御坂にそこまで物事を考えている余裕はない。バチバチ……！と体中を帯電させた瞬間、モスキート音のような甲高い音が施設の巨大なスピーカーから流れる。

そして御坂の体中から力が抜けた。

力が抜けただけではない。超能力を使うための演算もうまくいかない。演算ができなければ超能力は使い物にならない。

キャパシティダウン。この音を発生させている装置の名前だ。キャパシティダウンの発動と共に、絶望的な戦いが幕を開ける。

「何よ……これ……」

地面に両手両膝をつけた状態でそれでも目のう前のテレスティーナを睨み付けながらなんとか言葉を絞り出す。

「アッハッハッハッ！バッカじゃねーの！？テメェみてェなバケモン相手にすんだ。なんも用意してねェとか思ってんのかァ！？」

テレスティーナがそれに答えるはずもなく、バカ笑いと共にまともに立ててすらいない御坂の顔面目掛けて強化された拳が振り下ろされる。

御坂は反射的に横に転がり、事なきを得る。

「ふざっ…けんなぁぁぁぁぁ！！」

怒り共に無理やり全身に力をこめる。だが放たれた電撃はテレスティーナの横を素通りするだけで、事態は何も進展しない。

「怒っちゃいーや！」

ふざけた言葉と共に放たれたのは装備していたグレネードランチャー。生身の人間相手に使う武器ではない。能力を満足に使えない今の御坂に当たれば間違いなく死んでしまうだろう。

しかし弾丸は御坂の真横を素通りするだけで、当たりはしなかった。

「ん？…あんだよ調整がいまいちじゃねーか。ま、それもおもしろいかァ？」

結局はそう言うことだった。別にテレスティーナが殺すのをためらったとか、そんな心温まる話ではなかった。人を殺すことと虫を殺すこと、それに違いを見出せない人間が彼女だ。

もう一度グレネードランチャーの銃口が御坂を捉える。今度も当たらないという保障はどこにもない。死力を振り絞り立ち上がった御坂は逃げるように走り出した。

「オラオラ！逃げろよレベル５のお譲ちゃん」

一方的だった。これは戦いというよりは虐殺。対等な立場で彼女たちは向かいあっていない。

気づけば御坂は壁にまで追い詰められていた。バチッと小さな電気を前髪あたりに発生させるがそれすらもうまくいかない。抵抗も

むなしくテレスティーナの腕が御坂の首を掴む。

「貴女みたいな子ってホントにステキ。正義感にあふれて頑張り屋で。そういう貴女やお友達のおかげで……あぁ後あの平和ボケしたガキも一緒にいたか。ま、どうでもいいけど。とにかくそんなあなたたちのおかげで子供たちを見つけることができたわァ」

「あ……ぐっ……」

首を強く締め上げられた御坂は抵抗すらもままならない。そんな状況でも戦意は失っていなかった。しかしそんなことはどうでもいいといわんばかりにテレスティーナは話を続ける。

「だからご褒美に教えてあげる。私の目的は『能力体結晶』を完成させること」

そこまで聞いた御坂の意識がついに途絶えた。そのことを確認したテレスティーナは乱雑に御坂を手放し、どこかと連絡を取る。

「おい、おもしれェモルモットが手に入ったぞ。誰か運んどけ！」

そしてテレスティーナがいなくなってしばらくした後駆動鎧（パワードスーツ）を着た人間と白衣姿の男が御坂を担ぎ、どこかに運ぼうとしていた。

「はいちょっと待ったー」

突然声が聞こえる。かなりドスのきいた声だった。その声が聞こえた方向を向いた瞬間、彼らの意識が一瞬で消えてなくなった。

「俺が追いかけとくから、お前はその子を病院まで連れて行っとけ」

「悪いな」

もう一人あとから来た少年がそう言うと、赤い、少し変わったデザインのバイクにまたがると、アクセルを勢いよく吹かした。

「よくまぁ騙してくれちゃって、暗部に落こってたころだったらありえねぇぐらいの失態だな」

男たちの意識を削り取った男。古澤悠斗は静かに続ける。

「木原……か。……やっぱここまで来るとダメだな。復讐はもうしないって思ってたんだけど……」

次の瞬間、彼の声色が信じられないぐらい怒りの滲んだ声に変わる。

「ブチ殺してやるよ」

裏切り（後書き）

感想待ってます！

過ちと復讐（前書き）

遅くなりました。なのに今回は短めだったりします。そしてまたはしょってます。（笑）

過ちと復讐

「各隊状況は？」

どこかのコクピットのような場所。その場所に駆動鎧（パワードスーツ）を身にまとったテレスティーナがいた。

『イエローマーブル、異常なし』

『ブラウンマーブル、異常なし』

「各隊そのまま予定通りに――――」

『――こちらブルーマーブル！超電磁砲（レールガン）を取り逃がしました！』

ブルーマーブルと呼ばれる隊から異常ありとの連絡が入る。おそらく悠斗たちが御坂を助けるさいに倒した人間のいる隊なのだろう。

「んだとォ！？……もういい！てめェらそこで首でもつってろォ！」

部下の失態にテレスティーナは激昂。冷たい言葉をいい放ち、そのまま一方的に通信を遮断した。

◆◆◆

とある病室。そこのベッドで御坂美琴は目を覚ました。不幸中の

幸いというのだろうか、目だった外傷もなく、ベッドから上半身を起こす。

「お姉さま！？」

「御坂さん！大丈夫ですか！？」

「痛いところとかありませんか！？」

御坂は一瞬自分が何故ここいいて、こうして横になっているのかがすぐに思い出せなかったが、少しあたりを見渡し、記憶をたどっていくと、思い出す。テレスティーナのしようとしていたことを。

こうして横になどなっていはいられない。そう思った御坂は立ち上ろうとするが、白井に止められる。

「お姉さま！？そんなすぐに動かれては！？」

「どいて黒子。こんなところでのんきに寝てる場合じゃない。早く、春上さんたちを助けないと……！」

「全ての責任は私にある。だから私があの女を止める。どきなさい黒子」

「———そいつは聞けない。おとなしくそこで寝てろ。あのクソババアは俺が殺す」

病室のドアへ向かう御坂を止める人物が立ちふさがる。

古澤悠斗。彼女を助け出した男だ。彼は研究者を嫌い、特に木原

の姓を名のる研究者を嫌悪している。

御坂を止める理由は彼女の身勝手な独りよがりの行動を気づかせるためではない。あくまで自分自身のため。もし御坂が一緒にいれば間違いなく殺しを反対する。しかし彼は間違いなく彼女を殺す気でいる。そしてそれを誰かに邪魔させるつもりはさらさらない。翔に関しても、居場所を追跡させる以上のことはさせるつもりはない。

「それは聞けないわ。力づくでも通してもらうわよ」

悠斗の言葉に御坂が納得するはずもなく、前髪の辺りに電気を帯電させ始める。戦う準備は万端だ。

「ここは病院だ。まさかそんな場所でお前の能力を全開にして戦うつもりか？自分がここを通るためならこの病院に入院している患者たちはどうなってもいいと？」

「……ッ！」

彼の言葉に御坂は押し黙る。当たり前のことだが彼女自身そんなことが許せるはずがない。しかしここで能力を使って戦うといわれた通りの事態になりかねないのもまた事実。しかしここを通らなければテレスティーナへたどり着くことはできない。

「そういうわけだ。お前ら全員ここで待ってな。俺は絶対あのババア殺してガキどもを全員助け出してやる」

恐ろしいほど冷徹な声に御坂や白井たちは背筋に悪寒を感じる。いやな汗が頬をつたう。それを見た悠斗はあくまで冷静に、御坂たちのことなど眼中にないかのように話を続けた。

「邪魔するならお前らから殺す。知った顔だからって容赦はしない」

ただそれだけ、そう告げた悠斗は病室を出ていく。御坂はそれに対して止めることなどおろか、声をかけることすらすることができなかった。

「どうして……？」

悠斗の影が消えたドアを見つめていた御坂がポツリとつぶやく。

「お姉さま、私たちも向かいましょう。テレスティーナの野望を砕きに」

白井がそう言う。彼女に悠斗がいったことを守るつもりはまったくない。というより、止める人間が増えてしまった。理由は分からないが彼は間違いなくテレスティーナを殺そうとしている。風紀委員（ジャッジメント）としてこれを黙って見過ごすわけにはいかない。

「黒子……」

それでも御坂は未だに責任は自分にあると思いなかなか首を立てにふらない。

「御坂さん。御坂さんにとって、私たちって何ですか？」

ここに来て、初めて佐天が口を開く。

「何って、友達だけど……」

御坂はそこまで言ってあることに気づいた。その瞬間、先程の言葉が再び胸の中で繰り返される。佐天や初春とはまだあって数ヶ月。しかしその数ヶ月の間に色々なことがあった。でもそれをいつも４人で乗り越えてきたではないか。

幻想御手（レベルアッパー）事件のときは佐天が意識不明になったときは彼女の真意に気付けなかったことに死ぬほど後悔した。後悔したはずなのにまた同じ過ちを犯すところだった。

「ごめん……私…またみんなに迷惑かけて……」

「――迷惑なんかじゃないです。でも、離れて心配するぐらいなら、一緒に苦労したいんです。だって、それが友達じゃないですか？」

「あ……」

「古澤さんにもガツンと言ってやりましょう！」

御坂は改めて気づかされる。友達の大切さを。どんなにつらくても、どんなに苦しくても、笑いあい、励ましあえる。そんな存在が、世界で一番大切だと――。

◆◆◆

古澤悠斗は途中で待たせていた翔のバイクに乗って子供たちを乗せたトラックを追いかけていた。乗っているといっても氷でサイドカーの助手席を作り、それをはっ付けるというでたらめな方法だが。それに悠斗を待っていたため多少遅れをとってしまっている。しか

しカブトゼクターの案内とバイクの桁外れの性能のおかげであっという間に距離を縮めている。

（俺が…誰かを救うことなんてできるのか……一度失敗したことを……なぁ、翼？）

悠斗はだれに言うわけでもなく、そんなことを思う。彼の今までの行動には一括性がいまいちなかった。揺れている。怯えている。彼は、見えない何かに。

過ちと復讐（後書き）

佐天さんの出番を減らす悠斗ｗｗてかお前ホントに主人公かよ……

開戦（前書き）

そんな訳で今回も駆け足です（笑）

開戦

翔の運転するバイクはすでに子供たちを乗せるトラックに追いついていた。後はこのトラックをいかに衝撃を加えずに止めるかだ。

（……あの青い車…木山の…ッ！？）

悠斗は少し前にいる車を見つけ絶句する。木山春生が何故ここに？決まっている。子供たちを助けるためだ。

しかしここで予想外の事態が起こる。急にトラックの荷台の部分が開いたのだ。しかもそこにいるのは子供たちではなく、茶色の駆動鎧（パワードスーツ）に身を包んだテレスティーナの部下というおまけつきで。

「――ッ！？」

「まずっ！？」

翔も悠斗も一瞬驚きで反応が遅れてしまった。その間にも自分たちや木山の乗る車にグレネードランチャーが向けられる。

だが銃口が火花を散らすことはなかった。電撃のがトラックに直撃し、横転させたのだ。勿論これは偶然ではない。これほどの電気を操る能力者などそうそういない。そしてそれができる人間を悠斗は一人知っている。

「ったく……アンタら二人とも一人で突っ走ってんじゃないわよ」

「このトラックはおとりです！子供たちは乗ってません！」

やってきたのは御坂だけではない。白井や初春。固法。さらに金属バットを持った佐天までいる。いくらなんでも急すぎる展開に木山は呆然とするしかなかった。しかし事態はまだまだ動く。

本人の許可を取るのよりも早く佐天と初春は木山の車に乗り始める。驚く木山などお構いなしに。

「乗ってください！私がナビします！」

「……お前ら」

いまいち状況が飲み込めてない悠斗だったがとりあえずこれだけは分かる。御坂たちは自分の警告を無視してやってきたということだけは。

「何とでも。ただこんなところでいがみ合ってても子供たちは助けられないと思うわよ。絶対にね」

病院のときとはまるで立場が逆になってしまった。確かに今ここで御坂たちを相手にしていては時間がいくらあっても足りない。それにこうなってしまってはもはや彼女たちを止めることなど不可能に近いだろう。それこそそんなことに裂いてる時間などない。

「……わぁったよ……」

「いいのか？」

翔は少し戸惑いながらも悠斗に確認を取ると、悠斗は軽くうなず

く。それを見た彼は、すでに出発した木山の車を追いかけた。

◆◆◆

そしてすでに目的地についてしまっているという子供たちを追いかけるべく急ぐ彼らを追うものがいた。

『いいなぁ…』

辺りに誰かの声が響く。聞き覚えのある声だ。

『それぐらいじゃねェと…』

同時に道路のが大きく揺れ始める。

（ヤバい……ッ！）

嫌な予感がした翔はアクセルを無理やり吹かし、一気に速度を上げる。

『ぶっ殺しがいがねェもんなァ！？』

今まで何処に隠れていたのかと言いたくなるような巨大な駆動鎧（パワードスーツ）がテレスティーナの声を発しながら道路を突き破って現れたのだ。

揺れる足場にハンドルを取られそうになるのをどうにか踏ん張って車体の安定を図る。

「木原……テレスティーナアァァァァァァァ！！」

叫び声と共に悠斗が演算を開始しようとした瞬間、再びキャパシティダウンが辺りいったいに鳴り響いた。

「――ッ！？」

「また……！」

『あっひゃっひゃっ！バカだなテメェら揃いも揃って！』

かん高い音と共にテレスティーナの人を完全にバカにしきった声が鼓膜を震わせる。

「ほらほら逃げろ逃げろ！」

御坂や佐天を乗せた木山の車。悠斗を乗せた翔のバイク。いま戦える人間は一瞬のうちにすべて無効化されてしまった。

「どうした！？」

「わかんねぇ……演算が…グッ……！」

能力者だけを苦しませるキャパシティダウン。つまり能力者でない翔にはただの甲高い音でしかないのだ。

周りの状況から考えれば戦況は不利。いくらレベル５でも超能力が使えなければただの人。木山は戦える人間ではないし、そもそも武装している人間はこの場にはいない。

（やるしかねぇか…？）

巨大な駆動鎧（パワードスーツ）が迫っているなか、彼は決断に迫られていた。彼には一応戦うための力がある。しかしそれをこの場で使っていいのだろうか？自分の力は本来この場にあるはずのないもの。それをそう易々と使っていいものなのだろうか？

以前魔術師と戦ったときは学園都市の駆動鎧（パワードスーツ）と偽った。科学に疎い魔術師ならそれに納得したのかもしれない。しかし今回の相手は科学のエキスパート。ごまかしが効くとは考えづらい。

ふと隣に座っている悠斗の苦しそうな顔が目に入る。それだけではない。木山の車の中では間違いなく御坂たちもこの音に苦しんでいることだろう。

その事実だけで悩みを振り切るには十分すぎる材料だった。彼はテレスティーナの駆動鎧（パワードスーツ）の足元にカブトゼクターを出現させると、カブトゼクターは駆動鎧（パワードスーツ）の車輪を破壊する。

『なっ……！？』

予想外の事態に抵抗もできずに駆動鎧（パワードスーツ）はそのままバランスを崩して勢いのまま花火を散らせながら道路を削って、スピードを落としていく。

それを見た翔は一度バイクを止めると、木山へ車を止めるよう促す。

「いったい何が……？」

キャパシティダウンの影響を受けていない木山はテレスティーナがひとりでに事故を起こしたことを不審がるが、翔は特に効かず、悠斗の体を下ろす。

「貴女はこいつ連れて先に行ってください。奴は俺が足止めしておきます」

「……いいのか？この音に反応しないということは君はレベル０なのだろう？」

「大丈夫です。こう見えても俺、強いですから」

「……死なないでくれよ」

翔の目を見た木山は簡単に引き下がる。彼女はあの目をする人間を何人か知っている。そしてその目をするときは大抵何を言っても無駄だ。それを知っているからこそ彼女すぐに引き下がったのだ。

「だから大丈夫ですって」

そう翔は微笑みながら多少抵抗する悠斗を半ば強引に木山の車の後部座席に詰め込むと、ドアを閉めた。

「行って下さい！あいつが起き上がる前に！」

木山は苦い顔をしながらうなずくと、車に乗り、罪悪感を振り切るように車を発進させる。

『で？　テメェは何なんだ？ヒーロー気取りか何かか？』

駆動鎧（パワードスーツ）まるで何事もなかったように起き上がる。しかし車輪は破壊した。奴が木山の車を追跡するのは難しいだろう。

「そうだな……ヒーローってことなら……変身ヒーローってとこか？」

『あぁ？』

予想外の彼の軽口に怪訝な顔をするテレスティーナ。しかし翔は態度を変えるつもりはない。

『あっそ。じゃあ死ね』

そんなあっけない言葉と共に人など簡単に粉々にできる駆動鎧（パワードスーツ）の拳がまっすぐ翔の体へと向かっていく。が、直前のところで何かに軌道を強引にそらされた。

「まぁ実際はヒーローじゃねぇけどな」

言葉と共に拳をそらした何かが彼の手に収まる。カブトムシを模した赤い機械、『カブトゼクター』だ。

「変身ッ！」

《ＨＥＮＳＨＩＮ》

《Ｃｈａｎｇｅ　Ｂｅｅｔｌｅ》

そして現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだカブトムシ型のマスクドライダー、『カブト』。正真正銘、この世界に存在するはずの

ないものだ。その姿にテレスティーナの動きが止まる。

『何だそりゃ…？』

「さあねっ！」

言うのよりも早くカブトはクナイガンをアックスモードにして駆動鎧（パワードスーツ）の懐へ走り始めていた。

『チィ！？』

だがそれを四方八方から飛んでくるミサイルが彼の行く手を阻む。さすがにこのまま突っ込んで行っては自殺行為に近い。変身しているため死にはしないだろうがダメージは避けられない。そう思った彼は横に大きく回避する。

次の瞬間自分がさっきまでいた場所より少し前にミサイルがいくつも着弾した。直撃を避けたとはいえ多少近かったせいか、風圧に少し押され、視界が煙によって一気に悪くなる。

「……ッ！？」

その煙を利用してか、視界の悪い中、的確に彼を捉える機械の拳が突然目の前に現れた。視界に捕らえるのが遅すぎたため避けている時間はない。両手を目の前でクロスさせガードの体制をとっさにとる。

ゴギャアッ！　と鈍い音が鳴る。同時にカブトは少し地面を転がった。拳が直撃するのと同時に後ろへ飛ぶことによって、威力を多少緩和させたのだ。

「っぶね……」

転がり終えると同時に彼は立ち上がると、ガンモードに握ったクナイガンを駆動鎧（パワードスーツ）に向かって連射する。

『きかねェよ、んなもん！』

「ダメか！？」

攻撃が効かなかったのを確認すると同時、再びミサイルが彼に向かって放たれた。

「おあぁ…ッ！？」

飛んでくるミサイルに若干焦りを見せながらもクナイガンから放たれる弾丸は正確にミサイルに直撃していく。

『それが何なのかは、テメェをつぶしてからじっくり考えさせてもらうとするかァ』

「やれるもんならな」

カブトはクナイガンをクナイモードに変化させ、それを逆手で握り、それからベルトの横にあるスイッチを叩いた。

《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》

その電子音を聞いたが最後、決着はついた。

開戦（後書き）

感想待ってます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2895v/

とある太陽神と氷結水龍《フリーズドラゴン》

2011年11月17日21時15分発行